萬葉

昭和二十八年七月十五日發行

譬喩歌の性格……扇畑忠雄（一）
萬葉貴族の生活圏……薗田香融（九）
人麿における推定表現の丹精……森重敏（二三）
「わわらば」と「わくらば」……井手至（三三）
「何時邊乃方」考……野中春水（四〇）
「採手折」考……竹岡正夫（四六）
萬葉集講話　八……澤瀉久孝（五三）
黄葉片々と類聚古集……吉永登（六一）
袖中抄「三袖」存疑……佐竹昭廣（六三）
「越野過去」訓義私按……木下正俊（六四）
萬葉關係雜誌論文目錄・彙報・編輯後記

萬葉學會

第八號

昭和二十八年七月

前號目次

萬葉集における心情表現の特性……北住敏夫
白鳳の宮廷歌人……北山茂夫
露霜攷……武智雅一
「梅の花咲き散る園」私考……和田徳一
入聲音より見た人麻呂の用字法……三吉陽一
東歌研究のノートから……後藤興善
助動詞「たり」の形成について……春日和男
萬葉集講話　七……澤瀉久孝
黄葉片々
濱木綿の百重なす考……小清水卓二
萬代に過ぎむと念へや……内田曉郎
萬葉關係著書目錄

譬喩歌の性格

扇畑忠雄

開花から落花までの過程が「花」の一生とも考へられるが、それは素朴な自然觀察にすぎない。「花」の生命的な働きはその結實にいたつて初めて完成されるからである。實は花の延長であり、變形であり、さらに言へば完成である。さうした花から實への自然現象が、萬葉集にどう扱はれてゐるかといふ問題からこの稿をはじめたい。

(1)冬ごもり春べを戀ひて植ゑし木の實に成る時を片待つ吾ぞ（九・一七〇五）

(2)花咲きて實は成らねども長き日に念ほゆるかも山振の花（十・一八六〇）

(3)風交り雪はふるとも實に成らぬ吾家の梅を花に散らすな（八・一四四五）

(4)わが屋前の花橘の何時しかも珠に貫くべくその實成りなむ（八・一四七八）

(5)わが屋前の花橘は散り過ぎて珠に貫くべく實に成りにけり（八・一四八九）

(6)君が家の花橘は成りにけり花なる時に逢はましものを（八・一四九二）

右の六首はいづれも雜歌の中に收められてゐる。雜歌・相聞・挽歌は萬葉集をつらぬく分類の三大要素であることは言ふまでもない。卷一・二を通じての部立や卷九の部立はその典型的なものであり、卷三、卷七（雜歌・譬喩歌・挽歌）や卷十三（雜歌・相聞・問答歌・譬喩歌・挽歌）、卷十四（雜歌・相聞・譬喩歌・挽歌）に見られる部立もやや雜然とはしてゐるが、歸するところ三分類の範圍を出てゐない。表現技巧の上から名づけられた譬喩歌や表現形式の上から名づけられた問答歌が內容的に相聞歌と全く相かさなるものであるかどうかは問題の殘るところであるが、そ

の心理的傾向と發想的態度とにいちじるしい相聞的性質をそなへてゐることは疑ひえない。

ともかく右のやうな萬葉集編纂に見られる三分類にしたがへば、相聞や挽歌でないものがすべて雜歌として處理されてゐるのであるから、この六首の作も分類のまゝに雜歌として扱ふべきであり、そこに相聞歌的解釋を導入してはならないだらう。(1)は人麻呂歌集所出の獻舍人皇子歌であるが、「片待つ」の對象は「實に成る時」であり、(2)の「長き日に念ほゆる」の對象は「山振の花」であり、(3)の大伴坂上郎女作は落花を惜しむ情そのまゝであり、(4)及び(5)の大伴家持作は花橘の結實に對する詠嘆である。ただし(5)は題詞に「惜橘花歌」とあるから、花に重點があるやうに解されるが、その詠嘆はあくまで珠に貫くべく實に成つた現實から發想されてゐる。(6)は遊行女婦の作であつて「花なる時に逢はましものを」の下句に相聞的譬喩のひびきが聞きとれさうであるが、雜歌中の一首と見るかぎりに於いて、「花なる時」は橘の花なる時に解さねばならない。

萬葉集の分類からすれば、そのいづれも雜歌であつて詠物の性格をそなへたものであるが、ひろく和歌の本質を抒情性に求めるとき、詠物といへどもその發想を支へてゐるものは作者の情でなければならない。その抒情の對象となるものが、物それ自體である場合も或いは物を表面の素材としながら暗に物に寄せて表現する場合もありうるのである。後者においては、譬へるものを表に提示して譬へられるものを暗示しようとする隱喩的方法をとるものが多く、その解釋如何によつては詠物か寄物かの識別を殊にしたり、あいまいにしたりする場合が多いのである。創作者自身にとつては勿論のこと、享受者にとつても詠物か寄物かの區別はあきらかでないのが一般であらう。なほ言へば、敍景歌と抒情歌との區別が無意味などとくに、物を詠みながらもその物に寄せて（その寄せ方に種々の技巧形式があるのだが）、作者の情の抒べられるのが詩の本體なのではあるまいか。したがつて一往雜歌の中に分類されてある作品の中にも寄物的要素をあながちに無視することはできない。分類といふことは、所詮編纂に屬することなのだから。

本集の分類にしたがつて(1)から(6)までの歌をすべて雜歌とみとめ、「實に成る時を片待つ吾ぞ」「長き日に念

ほゆるかも山振の花」「吾家の梅を花に散らすな」「何時しかも珠に貫くべくその實成りなむ」「散り過ぎて珠に貫くべく實に成りにけり」「花なる時に逢はましものを」をそのまま詠物的態度によつて表出されたものとしても、植物の花や實に對する作者の詠嘆は極めて人間的（或いは相聞的と言つてもいい）である。詠物といつてもその限りにおいては純粹な客觀詠ではない。つまり、これらの作品を寄物的な相聞歌ではないとしても、そこへ極めて近く歩み寄つた作品だといふことは言ひうるであらう。「實に成る」ことを明らかに譬喩として表現した幾首かの歌（後掲）の發想的原型がこれら六首の歌に求められるのではないかと思ふ。

（1）の作意については土屋文明氏の「萬葉集私注」に「植ゑる時には、花咲く春を戀ひ植ゑたのであるが、花咲くのを見れば、更に其の實となるのを待つ云々」と述べられたごとく、花に對してその結實を待つ思ひである。「私注」にはさらに題詞の「獻舍人皇子歌」を疑ひ、もともと流布の民謡であつたものが「獻舍人皇子歌」と訛傳されたものであらうと推測し、戀愛の成就をこめた譬喩歌に屬すべき歌のやうに解されてゐる。この歌に譬喩的寓意のつよく感じられるのはやはりもともと民謡であつたことを物語るものではあるまいか。そして後に「獻舍人皇子歌」と訛傳されたことと雜歌に分類編入されたこととに、編纂における一つの合理化がみとめられるやうに思ふ。

（2）は實の成らない山振を意識に置いて、その花を「長き日に念ほゆるかも」と嗟嘆したものであり、（3）も同樣、現在まだ結實してゐない梅についてその花を惜しんだ歌である。山振の不結實、梅の未結實の相違こそあれ、實に對應する現前の花への情が一首の中心をなしてゐる。

（4）と（5）とは類型の歌であるが、（4）は橘の花に對してその結實を待ち、（5）はすでに結實した橘に對してその過ぎ去つた花を惜しみ思ふ意である。「何時しかも」と「散り過ぎて」との句がそれぞれの發想を逆にしてゐる。（6）は（5）に比して一首の構成を異にしてゐるが、現前の結實に對して花を思ふ情に共通したものがある。ただ「散り過ぎて」と消極的に花を惜しむ意と「花なる時に逢はましを」と積極的に花を思ふ意とに微妙な差違のあることは否定できない。

さらに(2)(3)(5)(6)とを比較してみると、共に花を思ふ歌ながら、前者は現前の花を思ひ、後者は過去の花を思ふ點に差違がある。いはば前者は相聞的であり、後者は挽歌的だとも言へようか。

花と實との關係に對する自然認識及びそれにもとづく心情表現の型は、以上のやうな結合や對應を示してゐる。これらを原型的なものとして、集中多く見られる相聞・寄物陳思・問答・譬喩歌に分類された「實に成る」歌を扱つてみたいと思ふが、それらはすべて廣義における相聞歌に解してさしつかへない。

花に咲き、實に成るといふ植物の成長過程は、たとへ生物學的知識はなくとも古代人にとつて日常觀察しうる自然現象だつた筈である。それは又生物共通の生命現象だといふ認識を介せずとも、人間の世界にただちに引きうつして理會しうるものでもあつた。殊に花の完成である結實が、戀愛の成就に結びつけられやすいことは當然であつて、自(1)至(6)の歌が形式的に雜歌の中に編入されてゐるものの、編纂以前におけるそれらの作品の創作意識・傳承意識・享受意識にまで立ち返つてみれば、多分に相聞的寓意がみとめられるやうである。寓意とまで行かなくても、植物に對する單なる客觀の歌ではなくて、相聞的感情が濃厚に見られる。この點が、植物の結實を媒材として人間の戀愛を譬喩的に歌つた相聞歌を多からしめた所以であらう。

(7)妹が家に咲きたる梅の何時も何時も成りなむ時に事は定めむ（譬喩歌、藤原八束、三・三九八）

(8)妹が家に咲きたる花の梅の花實にし成りなばかもかくもせむ（譬喩歌、藤原八束、三・三九九）

これらは(1)の原型にもつとも近い歌である。いづれも花に對してその結實を待つ意であるが、結句の「事は定めむ」「かもかくもせむ」といふ表現が、四句までに譬喩的媒材としての意味を強く擔はせてゐる。ここに(1)に比べて譬喩歌たる分類理由が存する。

(9)はしきやし吾家の毛桃本繁く花のみ咲きて成らざらめやも（譬喩歌、寄木、七・一三五八）

(10)出でて見る向ひの岡に本繁く咲きたる花の成らずは止まじ（春相聞、十・一八九三）

この二首も(1)の原型に屬するものと見られるが、結句の「成らざらめやも」「成らずは止まじ」に一つの特色が

存する。(10)は何の木について述べたか不明であるが、同類の歌から推すと、(9)同様、毛桃と見なしていい。共に現前の毛桃の花に對しつつその結實を強く願望する意であつて、毛桃の實の當然成るべきことわりを前提としてゐるところに、「成らざらめやも」「成らずは止まじ」の積極的な詠嘆が打ち出されてゐるのである。

(11)大和の室原の毛桃本繁く言ひてしものを成らずは止まじ（譬喩、十一・二八三四）

(12)吾妹子が屋前の橘いと近く植ゑてし故に成らずは止まじ（譬喩歌・和ふる歌、三・四一一）

は同型の歌であるが、(9)(10)のやうに花と實とを對應せしめてゐない。しかし「成る」とか「成らない」とか言ふ以上、實の前身である花は表に出てゐないだけであつて、作者に意識されてゐただらうことは疑へない。これ亦、「成らずは止まじ」の強い決意的表現は桃や橘の結實を當然のこととした自然認識にもとづいてゐるのである。

(13)見まく欲り戀ひつつ待ちし秋芽子は花のみ咲きて成らずかもあらむ（譬喩歌、寄花、七・一三五八）

(14)吾妹子が形見の合歡は花のみに咲きてけだしく實に成らじかも（春相聞、大伴家持、八・一四六三）

これも同型であるが、結句がそれぞれ「成らずかもあらむ」「けだしく實に成らじかも」といふやうに、結實すなはち戀の成就をおぼつかなく思ふ諦觀に終つてゐるのは、萩や合歡の實がほとんど氣づかないほど微細であつて、古代人の自然認識では實に成らないものと思はれてゐたからであらう。「玉葛實成らぬ木にはちはやぶる神ぞ着くとふ成らぬ木毎に」（二・一〇一）「玉葛花のみ咲きて成らざるは誰が戀ならめ吾は戀ひ念ふを」（二・一〇二）「山菅の實成らぬことを吾によせ言はれし君は誰とか宿らむ」（四・五六四）なども同様、玉葛や山菅の結實をみとめがたい自然認識から導かれたもので、(2)の「花咲きて實は成らねども」といふ山振の歌の發想に脈をひくものである。かうした植物の生態に對する認識（素朴だが素直な）を、譬喩的に作者の主情によく融合せしめてゐる點は、萬葉が事實を重んずる特色を例證するものである。

(15)向つ峯に立てる桃の木成らめやと人ぞささめきし汝が心ゆめ（譬喩歌・寄木、七・一三五六）

(16)橘の下に我立ち下枝取り成らむや君と問ひし子らは

も（寄物陳思、十一・二四八九）

この二首はいづれも實の成るべき桃と橘とを譬喩の媒材としてゐるが、「成らめや」「成らむや」といささかの不安をこめながらも決意をたしかめ合ふ趣であつて、（1）の系列に屬するものと解される。しかし內容的にはかなり複雜化されて一種の變型をなしてゐる。

（17）山菅の實成らぬことを吾によせ言はれし君は誰とかも宿らむ（相聞、大伴坂上郎女、四・五六四）

も婚姻の成就しないことを「山菅の實成らぬこと」に譬喩してゐるが、三句以下は屈折的に複雜な構造を示してゐる。

（18）玉葛實成らぬ木にはちはやぶる神ぞ着くとふ成らぬ木毎に（相聞、大伴安麿、二・一〇一）

（19）玉葛花のみ咲きて成らざるは誰が戀ならめ吾は戀ひ念ふを（相聞、巨勢郎女、二・一〇二）

のごときも同樣である。

（20）わが屋戸に咲きし秋芽子散り過ぎて實に成るまでに君は逢はぬかも（秋相聞、寄花、十・二二八六）

この歌の上句は（5）の上句「わが屋戸の花橘は散り過ぎて」と同型であるが、（5）の「散り過ぎて」に花を惜しむ情が汲みとれるのに比して、（20）の「散り過ぎて」は極めて輕く、下句に重點が据ゑられてゐる。さういふ意味では、むしろ（4）の變型に屬するものと見ていい。

（21）春の野に霞たなびき咲く花の斯く成るまでに逢はぬ君かも（春相聞・寄花、十・一九〇二）

（22）わが屋戸の穗蓼古幹採み生ふし實に成るまでに君をし待たむ（寄物陳思、十一・二七五九）

なども同型である。「實に成る」の譬喩ではないが「住吉の岸を田に墾り蒔きし稻のしか苅るまでに逢はぬ君かも」（十・二二四四）や「獨寢と薦朽ちめやも綾席緒になるまでに君をし待たむ」（十一・二五三八）も同一構造をもつてゐる。家持の「ほととぎす念はずありき木の暗の斯くなるまでに何か來鳴かぬ」（八・一四八七）のごときは、雜歌であつて詞書でも知られるやうにほととぎすの晩く鳴くのを恨んだ歌にすぎないが、前記の諸作と構造を等しくしてゐても「木の暗の斯くなる」の詠物性と「實に成る」の寄物性をよく對照せしめてくれる點で參考になる一首であらう。

（23）吾妹子が屋前の秋芽子花よりは實に成りてこそ戀ひ益りけれ（譬喩歌・寄花、七・一三六五）

この歌の場合、秋萩の實については微細に觀察して知つた上で作つたものか或いは觀念的に詠つたものか明らかでないが、寄花の譬喩歌として考へれば、現前の萩の花に對しつつ下句のやうな觀念がみちびき出されたものではないかと思ふ。その意味で、この歌は結實の一日も早いことを希求したものと見られる。(4)の「何時しかも珠に貫くべくその實成りなむ」の型に分類できるであらう。

(24)足柄の箱根の山に粟蒔きて實とは成れるを逢はなくもあやし（相聞、十四・三三六四）

この歌は、結實したといふ點では(6)に共通するが、結句の「逢はなくもあやし」で發想の方向を異にしてゐる。

(25)さぬかたは實に成らずとも花のみに咲きて見えこそ戀のなぐさに（春相聞・問答、十・一九二八）

(26)さぬかたは實に成りにしを今さらに春雨ふりて花咲かめやも（春相聞・問答、十・一九二九）

この問答歌における後者(26)も上句は(6)の型に通じながら下句において(6)の「花なる時に逢はましものを」と反對の發想をとつてゐる。これはもちろん(25)の問（遊戯的な戯愛のさそひ）に答へたもので、機智的な應酬を事としたものであるから、自然下句のやうな表現になつたものであらうがそこに種々の變型のあるのはとかく結實を現前にしながらなほ心の動搖の多い相聞の世界だからである。

以上、相聞の嘆きの種々相を「實に成る」といふ譬喩の一點から見て來たのである。正述心緒の歌ならば「たらちねの母に障らばいたづらに汝も吾も事成るべしや」（十一・二五一七）のごとくあるべきところを、すべて植物の結實を媒材として表現したのは、自然現象を素直に見、そこに直ちに人間を融合しえた萬葉人の生活態度をよく物語るものである。それらは表現技法の上から分類すれば、すべて譬喩歌と稱してさしつかへないし、さらに分類のし方を別にすれば、すべて相聞歌にあたるわけである。「實に成る」といふ一點において、自(1)至(6)の雜歌と自(7)至(26)の相聞歌とが或いは微妙に近接し、或いは相かさなつてゐる點を見のがしてはならない。雜歌といひ、相聞といひ、さうした分類は編纂のためのものであつて、作者自身の作歌目標とはなりえなかつたのである。

ここに注目すべきは、譬喩歌といふ部立が設けられたのは大伴家持の創始だらうといふ澤瀉博士の説（萬葉集の巻々

の性質『萬葉集大成』第一巻所收）である。これは、萬葉集を家持の作歌ノートと見る同博士の説と大きいかかはりをもつのであるが、家持が諸作品を蒐集編纂した際、新しい譬喩歌といふ名の部立のもとにそれらしい作品を配列一括したものが今日見られる譬喩歌なのであるから、當然家持の目をのがれた作品もしくは家持のもつ譬喩歌的規準に合はないでそのまま殘された作品も多いだらうと思ふ。したがつて家持のいはゆる譬喩歌をさぐるためには、今日見られる譬喩歌を限つて資料とすることも自然であるが、もつとひろく萬葉作品に卽して譬喩歌を見るには、一往旣成的分類の枠をとりはづすことが必要ではあるまいか。雜歌の中に譬喩歌として收められてゐる「わが屋前の毛桃の下に月夜さし下心よしうたてこの頃」（十・一八八九）「橘の花散る里に通ひなば山ほとゝぎすとよもさむかも」（十・一九七八）の二例の處理のごときも、一往分類の枠をはなれて檢討してみなければならないであらう。

ジョン・デュウイーがその『經驗としての藝術』の中で、「媒介と表現活動との結合は本質的である。表現活動は常に自然の素材を使用する。もつとも、ここで自然といふのは習慣的といふ意味でもいいし、また本原的、天然のといふ意味でもいい。この素材が、その場所柄やその役割を考慮して用ひられ、色々な關聯や包括的な情況の中で用ひられるとき、この素材は媒介となるのである。」と述べてゐるのは、素材と表現との一般的關係を、その間に媒介といふ要素を置くことによつて密接に考へようとしたものである。素材が表現活動に結びつくためには、素材が媒介にならなければならない。植物の結實といふものはあくまで自然の素材にすぎないが、それが「その場所柄やその役割を考慮して用ひられ、色々な關聯や包括的な情況の中で用ひられるとき」、媒介となるのである。「その場所柄やその役割」をこの場合「相聞の場所柄や相聞の役割」と書きかへれば、その媒介は當然譬喩性を帶びて來るのである。さうした譬喩的媒介が表現活動に結合されて、はじめて譬喩歌を生ずるのであるが、今までありにも表現面の技法といふ點にこだはつて譬喩歌を扱つて來たきらひがないでもない。むしろ譬喩的媒介を正しく取り上げて考察することが、譬喩歌の性格を、より一そう明らかにする所以だと思ふ。（六月八日）

——東北大學助敎授——

萬葉貴族の生活圏

――萬葉集の歴史的背景――

薗田香融

はしがき

白鳳から奈良末期に亙る萬葉集の作品の大部分が奈良朝七十餘年間に集中してゐることはいふまでもない。そして、その大部分の作品が、殆んど奈良朝貴族の作品であることも、これまた言を俟たぬ。例の東國の歌などにしても、果して地方民の作品であつたかどうかが疑はれてゐるし、[1] 又たとへ地方民の自作であつたとしても、防人の歌などと同様、貴族の撰擇を經由した上でのものである。

今さら冗説するまでもなく、萬葉集形成の主體が奈良朝の官人貴族であつたことは明かである。萬葉集の眞の理解には、この萬葉貴族の生活の實相を究明することが必須の前提である。以下私は、主として歴史學の面から出來る限り史料に忠實に當時の官人貴族の生活を描寫し、そして、それがいかなる意味を持つたであらうかを考へてみたいと思ふ。

もとより、一箇の試論に過ぎないけれども、歴史と文學の相互理解の一齣ともなれば望外のよろこびである。

一、「みやこ」

奈良朝の官人貴族を指して、萬葉集では屢々「大宮人」といふ稱呼を用ひてゐるが、私はこの言葉ほど當時の官人貴族の特徴を適確に云ひ得た稱呼を知らない。何故なら、彼等の第一の光榮は「みやこ」に住ひして、「大宮」に華

やかに宮仕へすることであつたからである。

大宮人にとつて、みやこに居住することはいはゞ一種の特權と考へられてゐた。このことはいろ〳〵の史料から推察されるところである。

例へば、藤原京の場合にしても、或いは奈良京、恭仁京の際にしても、奠都の計畫が出來上ると先づ最初に行はれるのは、新京の豫定地域内に古くから住みついてゐた土民を、他の地に移住せしめることであつた。[2] 新しい都には一定の資格を有するもののみが居住を許されるのであつて、いかに古くからその土地に馴染みのものであつても、僅かな立退料に甘じて去つてゆかねばならなかつたのである。みやこ造りとは、元來かくの如く古い社會機構を無視して全く新しい別天地建設の計畫によつて行はれるものなのであつた。

それでは、その計畫はどの様にして實行されてゆくのであらうか。云ふまでもなく先づ、皇居の占定が行はれ、つづいて百官人等に宅地が班給される。奈良遷都の際の記錄は見えないけれども、藤原の新益京[3]や、長岡遷都の際の記事[4]から、ほゞその實情を推すことができる。さてこれがすんだ上で餘つた土地は一般庶民にも班給された。[5] しかし乍ら靈龜元年六月條(續紀)の「諸國人二十戸。移二附京職一由二殖貨一也。」といふ記事などから勘へて、ある一定の選別が行はれたであらうことが想像される。

或いは又、延曆元年の氷上眞人川繼の叛に坐した大伴家持や坂上苅田麿等が職事のものは解任、散位のもの及び川繼の姻戚、知友は京外に追放といふ處分をうけたことや、[6] 同二年九月條(續紀)の近江の山村王の末裔と稱するもの〻「承嫡之戸」が「遷二附京戸一」されたことなど、政治的な、或いは儀制的な事情が京師に居住を許されることゝ密接な關係のあつた例である。

これらを要するに、「みやこ」に居住するといふことが重大な意味を持つてゐたことが知られるのであつて、この傾向は、平安時代に至つて、益々深まつて行つたやうに見える。

日本後紀、延曆十五年七月條に、大和國人大枝朝臣長人、河內國人大枝朝臣氏麻呂、菅原朝臣常人、秋篠朝臣全繼等十一人が、「貫二付右京一」されたことが見えてゐるが、この大枝朝臣、菅原朝臣、秋篠朝臣の三氏は夫々新撰姓氏錄の

右京神別の項の下にはつきりと錄されてゐる。これ等から推察して、姓氏錄の右京、左京の項に收められた諸氏は、記錄には見えてゐないけれども、夫々このやうな「貫附」が行はれたことであらう。當時最も新しい貴族であつた——源朝臣、良岑朝臣、長岡朝臣などが、左右京の項下に錄されるためには「貫於左京一坊」とか「貫於左京」（姓氏錄、左京皇別）とわざ〳〵注記を要したのも、平安京に於いても奈良朝と同じ事情が存したことを示すものではなからうか。然りとすれば姓氏錄の左右京、山城、大和、攝津、河內、和泉といふ地域別の分類による記載は特に留意さるべきであらう。上記の大枝朝臣や、菅原朝臣に決して河內や大和には錄されてゐないのであるから、姓氏錄の地域分類は出身地を示すものでなく、現にどこに貫されてゐるかを示すものであると考へねばならない。又、在京の氏々と、山城以下の諸國の氏々を一覽して、これ以後活躍する諸氏が殆んど在京の氏であることなども考へ併せて、姓氏錄の編纂の意圖が、在京の特權を有する貴族と、有せざる貴族を分別するところにあつたのではないかとさへ考へられるのである。

このやうに藤原、平城、平安の諸京に住居するといふことは一種の特權であつた。萬葉の貴族達が「大宮人」或いは「天人（あめびと）」（卷一八、四〇八二）「都方人」（同上、四一一七）と自稱するとき、そこに漂ふ一沫のほこらしげな態度は、實にかういふところから醸し出されたものであつた。

×

ところで一般に奠都とか遷都といふ事件は劃期的（エポックメイキング）な意味を帶びるものである。國史上の時代區分が通常帝都の變遷に指標を置くのもそれ相應の理由があるからである。

上來述べ來つた大宮人の特權意識も、このやうな時代意識と關聯させて考へてみると、愈々鮮かにうかび上つてくる。「時代」とは客觀的な時間の上に成立するものでないことはいふまでもない。實はこのやうな「みやこ」といふ如き空間的な存在に象徴されて始めて具象化するものなのである。

藤原京は平城京の豫備的な段階であつて、それ程重視するに及ばない。これは現在の定說であつて私も全面的に贊成である。問題は奈良の平城京であらう。

平城奠都は、右の様な時代性を擔ふ重大な事件であつ

た。和銅元年二月平城に新京を營むことを宣布した詔の中に、平城京は「帝皇之邑」たると共に「百官之府」たるべきことが明示されてゐる。平城京の要素は既述の通り、皇居と大宮人と、そして富民であつた。しかし乍ら、平城遷都は大宮人の世界を造り現はしたといふ點に於いて劃期的な意味を持ち得たのだと思ふ。且つての「みやこ」は「帝皇之邑」でこと足りたのである。たとへ「赤駒のはらばふ田井」（巻一九、四二六〇）であつても、天皇の神威を以つてすれば、忽ちそこに「みやこ」は成り立つたのである。然るに、それに比べて、天平の恰度眞中頃に行はれた恭仁遷都の際には左の如き詔が出されてゐるのは全く以つて對照的である。

自今以後五位以上、不レ得二任意往一於平城一。如有二事故一應須二退歸一。被二賜官符一然後聽レ之。其見二在平城一者、限二今日内一悉皆催發。自餘散二在他所一者亦宜急追。⑦

このやうに官人の京師招致を强制までしなければ、既に「みやこ」は成り立たなかつたのである。

平城京は貴族の別天地を創造したといふ點に於いて劃期的事件であつた。平安京はその點ではこれを繼承し發展せしめたに過ぎない。長岡遷都の時には高官連には新京の宅を造るために特にその費用を與へてゐる。⑧

要するに、平城京に始まる「みやこ」には、大宮人は不可缺の存在なのであつた。奈良朝は大宮人の時代なのであつた。かうした大宮人は「みやこ」に居住することを光榮としたのである。

×

大宮人は、京師内に「宅（いへ）」を有した。萬葉集に「寧樂の宅」（巻八、一四六四）「長屋王の佐保の宅」（巻八、一六三八）「平城の故宅」（巻一七、三九一六）など、或いは正倉院文書に徵しても、すべて「宅」といふ字を用ひてゐる。大宮人のみやこの生活はこの宅を根據にして展開された。そのみやこの生活のさまは萬葉の數々の作品が見事に物語るであらう。春日野の野遊びに打興じ、七夕の夜のさやけさを歌ひ高圓の野に秋萩を賞づる「遊び」の生活であつた。更には「二、三の大夫等、各、壺酒を提げて高圓野に登」つたり、（巻二〇、四二九四）某右兵衛督が府官を饗するに「饌食之を盛るに皆荷葉を用ふ」（巻一六、三八三七）といふ如き「風流」が尚ばれたのである。「みやこ」は造られるものであ

つた。大宮人たちは天賦の使命である「みやこ造り」に精根を打込み、自らは「遊士」「風流士」たらんことを志したのであつた。

宅の持つてゐる消費的な性格は、天皇の離宮のそばに設けられた彼等の別業が宅とも呼ばれたことを見ても明かである。奈良時代には屢々天皇の遷居が行はれたが、貴族も又そのたび毎に宅を造つて行つた。難波宮が常恒的な離宮であれば、彼等も常恒的な難波の宅を持つてゐた。藤原氏の難波三島の別業などは、その起源、大化以前にも溯ることが出來さうである。[10]

奈良京の宅は、つまり別業に共通した面を持つてゐたのである。これは平安京の貴族の邸宅が「さと」と云はれたのに比べて大きな相違である。平安京では貴族達は京師内の私宅（さと）から内裏（みや）に仕へたのであつたが、奈良朝では、京師内の貴族の私宅を「さと」とは呼ばなかつたやうである。平安朝の貴族の生活は、「さと」と「みや」、即ちいづれも京師内で行はれたが、奈良朝の大宮人の生活は、京師内の宅に於けるものがすべてではなかつた。彼等にとつて平安朝の「さと」に當るものに、京師外に「ゐなか」といふものがあつた。それ故萬葉には「みやこ」の「遊び」と共に「ゐなか」の生活が大きな部分を占めてゐるのである。大宮人が「みやこ」の「遊び」を志し、「遊士」「風流士」たらんと望んだのも、實は、この（彼等にとつては忌むべき）「ゐなか」の生活が根強く彼等を繫縛して離さなかつたからに他ならない。

二、「ゐなか」

養老の假寧令によれば、當時の官人には五月と八月の兩度に各十五日づつの「田假」といふ一種の定期休暇が與へられたことが知られる。即ち、五月、八月の農繁期には、官人達も「ゐなか」の自宅に農事の手傳ひに歸る慣はしなのであつた。萬葉集卷六の「秋八月二十日、右大臣橘家に宴せる歌四首」の中に右大臣（橘諸兄）の歌として、

もゝしきの大宮人は今日もかも暇を無みと里に出でざらむ

といふ一首がある。從來の注釋書によれば、平安朝式に、この「里」を京師内の官人の私宅と解してきたやうであるが、私はこの「里」こそ奈良朝官人のゐなか、即ち京師外。

の宅を指したものであると考へる。時恰も八月、ゐなかは收穫のさ中である。勿論右大臣の如き高官が實際農事の手傳ひに歸ることはなかつたにせよ、田假でひつそり閑としたみやこの中で、さういふ慣はしに背いた「みやこぶり」を誇つたのがこの歌であると思ふ。（因に正倉院文書に寫經生の請假の解が相當澤山殘されてゐる。）

右大臣なればこそかう豪語できたのであつて、一般の官人にしてみれば、この樣なみやこ一邊倒の生活は憧れこそすれ、實現したくとも許されぬはなしであつた。彼等が「みやこ」に倚り切らうとし、「みやびを」たらんと欲すれば欲する程、自らの泥くさい田舍生活の繫縛は眼に立つてくる。自己嫌惡を紛らす方便として、何とか自分が「みやびを」であることを示したかつた。彼等が里人（ゐなかびと）を蔑視した所以である。

里人しあな情なと念ふらむ秋の長夜を寢ぬ臥してのみ
（卷一〇、二三〇二）

と、里人の風流を解せざるを嘲つたのである。

ゐなか生活を脱し、みやこ生活にひたりきらうとし乍ら、それが出來なかつた理由は、當時の大宮人は、その「ゐなか」を自分達の生活の根據として居つたためである。京内の宅が彼等の消費面を代表すれば、京外の「ゐなか」こそ彼等の生產的な生活の場處であつたからだ。

先づ田舍には彼等の愛する女性があつた。萬葉の遊びや風流の世界に女性の現れることが尠いのは、このことに由る。有名な大伴家持の愛人大伴坂上大孃はたいてい竹田庄に住したらしい。

然とあらぬ五百代小田を苅り亂り田廬に居れば京師し念ほゆ（卷八、一五九二）

といつた風に、だから當時の大宮人の相聞歌は、京と田舍の往來といふ體裁をとるものが多かつた。それでも坂上大孃などは時々は京師の宅に留ることもあつたらしいが（卷四、七二三）その母大伴坂上郎女の如きは常時べつたりの田舍住ひである。萬葉集の註記類によつて、大伴氏は竹田庄や跡見庄といふゐなかを有し、一族の女性は殆んどこのゐなかに住してゐたことが知られるのである。だから

京師邊に君は去にしを誰解けか吾が紐の緒の結ぶ手懈む
も（卷一二、三一八三）

と、別れを悲しまねばならなかつたのである。

第二に田舍には彼等の生存の基盤ともいふべき「田」があつた。

妹が家の門田を見むとうち出こし情もしるく照る月夜かも（卷八、一五六九）

吾妹子が業と造れる秋の田の早穗の穟見れど飽かぬかも（卷八、一六二五）

我が門の禁る田を見れば佐保の内の秋萩すすき念ほゆるかも（卷一〇、二二二一）

「門田」といひ、「業田」「禁る田」といひ、すべてこの田舍の庄に附屬した田の謂である。彼等が田假を賜つた理由も、田舍生活から脱しきれなかつた理由もこゝにある。又、當時の在京官人の薄給であつた理由もこゝにあらう。

女性と田。これが大宮人を田舍に縛りつけた因由であつた。そして彼等の田舍の本據は京師内のそれが「宅」と呼ばれたに對して「庄」と呼ばれたことは、もう云ふまでもなからう。

前に平安朝の（京師内の）「さと」に當るものが奈良朝の「ゐなか」であるといつたが、平安朝の「さと」が女性の住居であつた點まで、奈良朝のゐなかの「庄」に似通つてゐるのも偶然ではなからう。（この點は、婚姻制の角度から更に糺明さるべきである。）

×

さて、大宮人の田舍生活の據點「庄」について、現在の學界では、後の庄園の濫觴をなすものであるといふ說が認められてゐる。たしかに奈良朝の諸文獻に見られる「庄」には、庄園の起源をなすものゝ多いことは事實である。（例へば、有名な越前の東大寺領の諸庄など。）

しかし、私は、それがすべてではなかつたと考へるものである。尠くとも、例の大伴氏の竹田庄や跡見庄に限つてそのやうな新しい貴族の地方開拓の據點となつた庄とは區別されなければならないと思ふ。竹田庄や跡見庄は、反對に、大宮人が「みやこ」に住みつく以前に、根を下ろしてゐた「ゐなか」の本據であつたと考へる。もつとも、「ゐなか」と云へば語弊が生ずる。（何故なら、「ゐなか」とは「みやこ」が生れて、始めてそれに對立するものとして創り出された言葉だからである。）こゝで、當時の用例に從つて本貫と置き換へようと思ふ。

このいはば新しい庄と舊い庄とは從來屢々混用されてきた。形や機構の上では、一應どちらも同じやうなものであつたかもしれない。

といふのも、新しい開拓の據點たる庄が、舊い生活の行はれた庄の機構や形式を模倣して建設されていつたからであらうと思ふ。

しかし、この兩者の間には次の點に於いて本質的に著しい相違を有してゐたのである。

先づ舊い庄は上述の通り、大宮人の本貫であつた。例へば、大伴氏の跡見庄は、萬葉集卷八に「衞門大尉大伴宿禰稻公の跡見庄」（一五四九）と見えるが、跡見庄は恐らく家持の一族である稻公の本貫なのであつたらう。又、竹田庄は同じ卷に、「大伴家持、姑坂上郎女の竹田庄に至る」（一六一九）と見えるやうに、家持の叔父宿奈麿の本貫であつたと察せられる。（卷四、七五九參照）

跡見は泊瀬の入口（卽ち、伊賀との通路）の、跡見驛[11]の附近、今の磯城郡櫻井町の南の有名な鳥見山のあたりと察せられる。「跡見の茂岡」（卷六、九九〇）とは他ならぬこの鳥見山であらう。古來伊賀への要路であつた點から、古く壬申の亂の際に大伴氏の祖先、大伴吹負が近江から「倭家」に歸つたといふ倭家こそ、この跡見庄でなかつたかと考へる。[12] もしさうだとすれば大伴氏の跡見庄の歷史はかなり古いことが確められるのである。

竹田庄の方は現に磯城郡耳成村に東竹田といふ地名が存し、同平野村に西竹田といふ地名が殘つてゐるから、大體この邊一帶を古くから竹田と呼んだものと思ふ。[13] 例の神武紀の猛田邑、或いは有名な猛田縣も同じであらう。

してみると、大伴氏は、鳥見山から竹田のへんにかけて數ケ處に庄を有し、本宗は跡見に、支宗は竹田始め幾つかの處を本貫とし、これら庄をその居宅としてゐたと察せられる。

かくの如く、大伴氏の竹田庄や、跡見庄は古くからの本貫であつたと考へられるのである。

第二に舊い庄は、これら大宮人の直接經營するところの生產機構であつた。庄には田が存在することは既に述べたところである。そして田假を賜つて彼等が自ら經營したことも上述の通りである。從つて、舊い庄は、奈良京から遠いところにあつては不便であるから、主として畿內に存し

たであらうことが推測される。前に引用した姓氏錄所載の氏族が、兩京と畿內五ケ國に限られてゐたことは、このことを暗示するものではなからうか。これに反して新しき庄は勢ひ、畿外（當時は外國とよばれた）に設けられることが多かつたのであらう。そして新しい庄は最初は、舊い庄を模倣して作られたため直接經營が行はれたであらうが、次第に間接經營化し、やがて庄園へと發展してゆくのである。

奈良朝には比較的規則正しく班田收授が行はれたらしいが、續日本紀には、畿內班田使のことが屢々見れる。これは、當時の貴族の私有地（卽ち、庄）が畿內に多かつたため、畿內の班田收授が最も厄介であつたからだと察せられる。

大宮人が拔けきらうとして拔けきれなかつた「ゐなか」生活とは、このやうな、彼等の本貫地の庄の生活であつた。

×

萬葉集はじめ當時の史料では、大伴氏以外の氏族の本貫乃至はゐなかを知ることはできない。ところが、今私はもう一つの例として皇室の「庄」を擧げることができると思ふ。大伴氏のゐなかの庄が跡見、竹田であつたやうに皇室の「ゐなか」が「島宮」であつた。皇室の本貫については未だ定說はないが、少くとも大化以後の本貫はこの島宮（現、高市郡島莊）であつたと考へられる。「島宮」についての史料は天武・持統紀邊から屢々現れてくるが、その「ゐなか」たる徵證を示せば左の通りである。

先づ萬葉集では

高光る我が日の皇子の萬代に國知らさまし島の宮はも

（卷二、一七一）

と、草壁皇子のこゝに住したことが、知られる。皇極二年九月に薨じた吉備嶋皇祖母命（皇極帝生母）も同卽位前紀には吉備女王と記されてゐたのが、吉備嶋皇祖母と改められたところから、島宮に住したのであらうと考へる。[14] この女王は、その夫帝舒明天皇が傍系（舒明天皇は敏達天皇の孫茅渟王の子）から卽位したため、他の天皇の母と異り、住むところがないため、皇室の本貫たる島宮に住したものと考へられる。大化二年三月の詔に「宜レ罷ニ官司處々屯田、及吉備島皇祖母處々貸稻ニ」（屯田と併記された點に注意。）とあるが、次に述べるやうに島宮は庄の大規模なものであつたから、

彼此勘へて女王のこゝに住した證明の一つとすることが出來る。奈良朝の頃には大伴氏のやうに女性を庄に置くことはなかつたが、その昔には女性や皇子を置いた一つの例とできよう。[15]

又、持統紀四年三月條によれば「賜京與畿內人、年八十以上者、島宮稻人廿束」と島宮に田のあつたことが知られる。かうして島宮は奈良時代にも皇室の「ゐなか」であつた。「神南備の清き御田屋の垣內田」（卷一三、三二二三）とは島宮の田であらうし、「三諸の山の離宮地（とつみやどころ）」或いは「神南備山の朝宮」（同上、三二三〇）とは正しく島宮そのものであつたに違ひない。三諸山も神南備山も島宮のやゝ北よりの丘である。

更に、福山敏男氏の復原された天平五、六年の「造佛所作物帳[16]」に

藁　六百卌圍　自嶋宮運車九兩

と、島宮に皇室の料田のあつたことが知られる。天平十年八月十五日の「粟籾檢定啓[17]」といふ文書がある。その中に

合粟壹萬捌伯捌拾陸斛伍斗陸升
宮裏收納七千六百卌四斛五斗六升外廿九斛
山口庄收納三千二百五十二斛
籾貳仟壹伯玖拾肆斛壹斗參升
宮庄收納一千七百卌一斛一斗三升
櫟本庄收納四百六十三斛
以前、檢定粟籾如前、謹以申聞、謹啓。

と見えるが、これは、宮裏、宮庄、山口庄、櫟本庄いづれも皇室の庄であつて、そこの收納穀を報告した書類と考へられる。山口庄は不明であるが、櫟本庄は現在の添上郡櫟（いちの）本町附近であらう。ところで「宮裏」「宮庄」であるが、これらは、他の二つに比べて一きは大規模であつたところから、私は島宮を指すものに他ならぬと考へるものである。即ち、島宮は、島宮庄或いは略して宮庄とも呼ばれたのではないか。これを更に有力に裏附けるものは東大寺奴婢籍帳[18]である。これによれば「島宮奴婢」といふのが「官奴婢」と共に最大多數を占めてゐる。即ち、これら多數の奴婢が皇室の庄である島宮庄に於いて、皇室の直接經營の下に耕作に從事してゐたのであらう。當時奴婢は次第に解放されつゝあつたのに、島宮に多數の奴婢の存したことは、舊い庄としての性格を端的に物語るものとして注目さるべきである。

島宮は以上から皇室の「ゐなか」であることは明かになつたと思ふ。皇室も又、大伴氏と同様、京師内の皇居(宅)と共に、島宮といふゐなかの庄をもつてゐたのである。

三、大宮人の兩貫性

上來私は奈良朝の大宮人が「みやこ」を志向しつゝも、今一方の足を「ゐなか」に根下ろしてゐたことを考察した。これを私は大宮人の兩貫性と稱したい。萬葉貴族の生活圏も從つてまた「みやこ」と「ゐなか」の兩方に亙るものであつた。萬葉文藝に見られる素朴感――惡く云へば泥くささ――もこれによるものであつた。しかし、あくまでも大宮人は「みやこ」に志してゐたのであるから、約言すれば「みやこ」への傾斜を持つた「ゐなか」貴族(兩貫貴族)であつたと規定されよう。

ところで、この様な事情は一般的な傾向であつて、そこには例外もあつた。その例外の最も甚しいものに例の大伴家持を擧げることが出來よう。大宮人の兩貫性が大伴氏の場合特に明瞭に觀察できたのも、一つには大伴氏が、一般の大宮人よりも田舍生活の繫縛が強く、舊い生活様式を濃厚に保存した家柄であつたからであらう。だから、みやこの生活と田舍生活を分離化する改革には反對の態度を取らざるを得なかつた。近江京勢力に反對して壬申の亂に吉野方として活躍したり、長岡遷都に反對して種繼を暗殺したのも、かういふ事情が大きく作用したのであらう。

理論的には、都會生活への批判は、都會生活に倦いたものから發せられる筈であるが、事實はさうとも限らない。家持が左に掲げるやうな「みやこ」の「遊び」に批判を歌ひ込んだのも右に述べた大伴氏の保守性によるものであつたらう。

……一日一夜も　離り居て　嘆き戀ふらむ　此念へば
胸こそ痛め　其故に　情和ぐやと　高圓の　山にも野に
も　うち行きて　遊び往けど　花のみ　匂ひてあれば
見るごとに　まして思ほゆ　いかにして　忘れむものぞ
戀とふものを(巻八、一六二九)

かうして家持は、地につかない、うはついた「みやこ」の「遊び」にひたり切れない田園詩人の風手を帶ぶるに至つたのであつた。

而して、當時の大宮人は、いづれも大なり小なり兩貫性

を有したのであつて、奈良京七十年は在地土豪が、都市貴族へと轉化する過渡期であつたと考へられるのである。この七十年の間に頻々と政權の爭奪が行はれたが、その爭ひに勝ち殘つた貴族は、次々と新しい庄を畿外に建設して、ゐなか生活と絶緣する準備をとゝのへたのである。自ら直接經營する野風を全く拭ひ去つた都市貴族のみによつて平安京は形成された。生活の切換へに遲れた大伴氏の如き兩貫貴族はやがては落伍者とならねばならなかつたのである。かうして平安朝の貴族文化は、全く兩貫性を拂拭した（泥くささの跡を斷つた）精練された文化となるのであつた。

×

萬葉貴族は、その著しい特質として兩貫性を有した。以下、これが日本上代史の展開に於いて如何なる意義を有したかについて、しばらく附說したい。

（一）大化の改新は畿內土豪群の連合勢力による全國支配であつた。[19] ところが近江京はこれら土豪群の要求にそぐはぬものがあつた。更に近江京貴族の專權によつて天皇制の弱化を招いた。こゝに畿內土豪の中心勢力である大和、河內の土豪勢力をかりて天皇制の確立を圖つたのが壬申の亂であつた。[20]

これら土豪達の貴族化の要求と、その本貫地からさう遠くないところといふ制限、この二つの條件から選ばれた適當なところに平城京といふ「みやこ」が創造された。平城京は兩貫貴族に誂へ向の「みやこ」であつた。それ故、奈良朝は大宮人の全盛期であり、從つてその爲、再び皇權の弱化をもたらした。

（二）平安遷都は、弱化した天皇制の復興を目指したものであつた。しかし今度は壬申の亂と異り、早く兩貫性を脫した都市貴族の力をかりて强行された。平安朝貴族は自ら直接經營する「ゐなか」を持たない代りに、新に畿外に間接經營による「庄」を建設して行く。これが所謂初期庄園である。これの經營には浮浪人が用ひられた。貴族は生活の餘剩から「みやこ」へと脫貫し、浮浪人は生活の貧困から本貫を離れてゆく。元來すべての國民を本貫に編附することを本旨とする律令制度は、正反對の理由から離貫して行つた貴族と浮浪人により、庄園を契機として否定されて行つたので

ある。

(三)かくて、大宮人の本貫地なるが故に、特別の意味をもつた畿内は、それほどの意味を持たなくなる。(三關停廢もこの點から考へてみると面白い事件である。)新に、在京か、在國かといふことが平安朝貴族の問題となつた。平安京では兩貫貴族を許容しなかつた。都市貴族か、然らずんば在地土豪か、である。これを分類、序列化し政界の安定を圖つたのが新撰姓氏錄の撰修目的であつた。

貴族の變遷を中心に、上代史の展開を略述すれば、右の通りである。兩貫貴族、卽ち奈良朝の大宮人の歷史的な意義は右の如くであつたと考へる。

むすび

當時の土豪が貴族化する場合、模倣の對象となつたのは、いふまでもなく大陸の先進文化、更に明確に云へば、六朝から唐に至る一聯の貴族文化であつた。この間のシナ文化にいろ〳〵の盛衰變化のあつたことにもよるが、これを受け容れる日本側の國情のさま〴〵な變貌によつて、文化の發展は極めて波瀾起伏に富んだものとなつた。今、これを文藝に限つて見るならば、近江朝文學——奈良朝文學——弘仁文學といふ發展の過程に於いて、萬葉集によつて代表される奈良朝文學が、古典文學として最も實り多きものであつたと認めるにやぶさかなるものはあるまい。

その理由は種々擧げられるであらう。しかし、私はその最も有力な理由の一つとして、當時の大宮人の兩貫性を擧げたいと思ふ。文學を產み出す主體の、生活の地盤の確實さ、適度な時代性、これが勝れた豐穰な文學を產出するのである。近江朝や弘仁期の漢文學が、その技巧や着想に於いて、先驅的な役割を果したけれども、結局文學としては充分成熟できなかつたのも、このやうなところに原因が潛んでゐたと考へられる。(二八・三・二七)

附言、本論を稿するに當り、關西大學吉永敎授、及び恩師横田健一敎授に御指導を賜つたことを附記して感謝の意を表する。

註

①津田左右吉「國民思想の研究」第一卷一二三—一二七頁。

②續日本紀、慶雲元年十一月、和銅元年十一月、天平十四年正月各條。

③これについては、喜田貞吉博士の「從來の飛鳥京内住居の重なる人々は、ここに此の新益京内に移り住む事となつた」といふ甚だ卓拔な見解がある。（「藤原京」七頁）。
④日本書紀、持統五年十二月、續日本紀、延暦三年六月、各條。
⑤續日本紀、天平十三年九月條。
⑥同　右、延暦元年閏正月條。
⑦同　右、天平十三年三月條。
⑧同　右、延暦三年六月條。
⑨同　右、延暦二年七月條、魚名の傳に見ゆ。
⑩「家傳」（鎌足傳）に、「歸去二三島之別業一」と見ゆ。當時物部氏も難波宅を持つてゐたことが崇峻紀卽位前紀に見える。
⑪日本書紀、天武八年八月條。
⑫書紀の天武元年紀の壬申の亂の記錄によると、吹負の倭家が飛鳥古京に程近く、跡見附近と想定すれば、大體すべての點で符合する。
⑬延喜式　神名帳　大和國に竹田神社と見え、又姓氏錄左京神別下竹田川邊連の項にも、十市郡刑坂川之邊有竹田神社と見える。
⑭萬葉に屢々現れる大伴坂上郎女は、大伴氏の女であつて、坂上之里に住したから（卷四）から呼ばれたことを考へ併すことができる。
⑮島宮と蘇我氏との關係を不問に附すことはできないが、私は、やつぱり、島宮は皇室との關係が第一次的なものであつたと考へる。
⑯福山敏男、日本建築史の研究、九四頁。
⑰大日本古文書、二の一〇〇頁。
⑱寧樂遺文所收。
⑲新日本史大系、古代社會　二四頁。
⑳直木孝次郎、壬申の亂について、昭和二十七年秋、京大讀史會大會研究發表。

人麿における推定表現の丹精

森　重　敏
——京都女子高校教諭——

詠レ雲

痛足河　河浪立奴　巻目之　由槻我高仁　雲居立有良志（巻七、一〇八七）

足引之　山河之瀨之　響苗爾　弓月高　雲立渡（同、一〇八八）

「右二首柿本朝臣人麿之歌集出」とあるが、これらが人麿自身の制作にかゝることは、作品そのものの質がこれを疑

ふことを許さない。このやうな場合は右二首にかぎらず、人麿歌集全般にしばしばあるのであるが、この二首の質はさらに私をして、兩者の間に初作とその改作との關係、その前後における人麿の推敲過程を想定すべく迫つてやまない。

痛足河の歌は抒情衝迫のままに直ちに成つたと想像してよい。固有名詞を三つまでとりこんだのも、表現のかならずしも熟さないところをとりあへず充塡した感が深く、第二句と第五句とに「立」の語が重ねてあらはれたのも、意識しての布置であるよりは期せずしての結果であるとすべきに似るからである。これらの徵表に加へるに、そもそも一首全體の發想のしかたが類型的なことも有力な心證でなければならない。すなはち人麿以前においても

阿佐遲波良　遠陀爾袁須疑豆　毛々豆多布　奴豆由良久母　淤岐米久良斯母（記）

八隅知之　我大王乃……　御執乃　梓弓之　奈加弭乃　音爲奈利　朝獵爾　今立須良思　暮獵爾　今他田渚良之　御執　梓能弓之　奈加弭乃　音爲奈里（卷一、三）

暮去者　小倉乃山爾　鳴鹿者　今夜波不鳴　寐宿家良思母（卷八、一五一一）

……神代從　如是爾有良之　古昔母　然爾有許曾　虛蟬毛　嬬乎　相格良思吉（卷一、一三）

のごときが存することを事々しく擧げるまでもなく、一般に原因理由によつて確信ある結果歸結を推定すること自體が、心理的にも極めて日常的であり歌の發想形式としてもおのづから一つの類型を形作るに至るであらうし、事實右のごとき歌體は人麿以後にも及んでゐる、そのなかにあつて、彼れのこの一首が特に著しい個性をもつとは思はれない。しかも人麿自身乃至人麿歌集そのものにさへ、同じ發想形式の作品が見出されるのである。

飼飯海乃　庭好有之　苅薦乃　亂出所見　海人釣船（卷三、二五六）

久方之　天芳山　此夕　霞霏霺　春立下（卷十、一八一二）

佐宵中等　夜者深去良斯　鴈音　所聞空　月渡見（卷九、一七〇一）

かくのごとくであるから、人麿はこの痛足河の歌を一首にまとめるについて、彼れが通常さうであるごとくには彫心鏤骨してゐない。もつとも、固有名詞や「立」の重複をかへつて一首の秀れた所以とうけとる向きもある。たしかに、このやうな大膽な語排列をあへてして一首を破綻せし

めない力量は稱すべきであるが、そのことゝこの歌を彫琢が、かくして「山河之瀬之を經た完成作であるとすることゝは同一でない。たとひこれが一つの絶品であるとしても、それは人麿の力量のおのづからの所産であり、人麿と他の作家作品との相對上のことであつて、かならずしも人麿自身の諸作品中において冠絶の位置を占めるものであるといふことにはならないのである。むしろ人麿はこの間の消息を自覺し、力量不足の後人が讃歎もしかねないその固有名詞や「立」の重複をこの一首の瑕瑾であるとし、またなによりもまづこの類型的發想形式が、いまや表現しようとする抒情内容に對して十分切實なものでないとした、と想像してかまはない。痛足河の一首は作者人麿にとつては、なほ璞であつたのである。

しかしてこれが琢磨の結果は、すなはち足引の歌となつた。固有名詞は不可缺の一つを殘して、とりあへずの充塡といふ感のもつとも著しい「卷目」が削られたことは勿論、「痛足河」も焦點を「由槻我(弓月)高」に絞るその效果を殺がないために單なる「山河」となつた。二つの固有名詞の除かれた上句の空白は、おのづから「河波立奴」の推敲形をもつて塡められることを誘致する。視覺的とも聽覺的とも不鮮明な「河波立奴」が、かくして「山河之瀬之響」と聽覺的に單純化せられて純粹度を高めることになる。しかもこの單純化によつて期せずして「立」重複の嫌ひが去つたことはいふまでもないが、單純化のいまひとつの方向は、固有名詞「痛足」を失つた「山河」に「足引之」枕詞を冠らせたことにもあらはれてゐる。「その心多(きは)なり」といふも直くひたぶるなるものは詞多からず」(眞淵)であり、末梢の細部は沒して核心のみがおのづから言表を得來るのが抒情詩の面目であるから、五句三十一音の短小詩型もそのやうな簡潔な言表を容れてなほ餘裕のあることがしばしばである。かやうな場合一首にまとめるための技術として枕詞の配置せられることがまたしばしばであつた。「山多豆乃迎乎將往」(卷二、九〇)といひ「奴婆珠乃吾黑髮爾」(同、八九)といふのもその一例である。これを「山多都禰」とし「打靡」と訛傳するときは、原作者個人の純粹な抒情詩的實體は心ない潤色に汚染せられた民謠に轉落もする。「痛足河」から「足引之山河」へはかやうな轉落とはむしろ逆に、うるさくさへあつて積極的な效果のない固有名詞を拂つた單純化の、その空白を盈した枕詞であることは勿

論である。

しかしながら前作から後作への推敲は以上で終つたのではない。抒情内容に一段と精神を引絞つた人麿に「苗（なへに）」の語が閃き出た。これが一首の構想を全體的に進境に導き、はじめて内容に切實なものとしてそのところを得たのである。しかもそれが、もつとも安易に必然性を缺いた固有名詞「卷目之」第三句のあとに据わつたことも一奇とすべきである。

「なへ（に）」は本來繼起的時間の構造をもち、前後して生起する二事象の關係を表現する。

鴈鳴乃　來鳴之共　韓衣　裁田之山者　黄始有（卷十、二一九四）

これがやうやく、一方に二事象の同時共存の關係をもあらはすとともに

葦邊在　荻之葉左夜藝　秋風之　吹來苗丹　鴈鳴渡（卷十、二一三四）

他方に二事象の原因結果と理由歸結との關係をあらはすことになり

今朝乃旦開　鴈之鳴寒　聞之奈倍　野邊能淺茅曾　色付丹來（卷八、一五四〇）

鴈之鳴　聲聞苗荷　明日從者　借香能山者　黄始南（十、二一九五）

つひには逆接の關係をさへあらはすに至る。

柔田津爾　舟乘將爲跡　聞之苗　如何毛君之　所見不來將有（卷十二、三二〇二）

なほこれら以外の意味分化や、一般にこのやうな接續關係の意味分化の原理については詳論の場所でないから差控へるが、かくのごときなかにあつて、足引の歌「苗」の占める位置はすこしく微妙である。すなはち、一方には初作の歌と同樣の理由歸結の關係の意味をなほ含むとともに、他方には前後繼起の關係の意味をもあらはしえてゐる。一層適切にいへば、初作の「良志」による一方的な理由歸結關係が自身を失ふことなく「苗」に含まれつつ、しかも「苗」本來の前後繼起關係の意味にまで深められる形となつたのである。いま問題の抒情内容の表現に當つて、前後繼起の關係把握が理由歸結の其れよりも抒情主體にとつてはより直接的具體的根源的であることはいふまでもない。二事象の理由歸結による推論的整理よりも、前後繼起としてあるがまゝに受入れることが、ことに自然現象に對する抒情の人間であるいまの場合の人麿にとつては、本然のあるべき

態度であることもいふをまたない。かくして「良志」から「苗」に行くことによつて、人麿の境地はその當然あるべき境地へと深化したのである。

しかもこのやうな微妙な意味に對應する言語のうへでの形は、「雲立渡」における助動詞「良志」の果斷な省略に、あることは深く注意せねばならない。省略せられた「良志」は言語の形からは不可見ながら、なほ活きて働き、しかも形のあつた初作の場合以上に止揚せられた態位において働いてゐるのである。初作が第二句で「立奴」と切れるのを「雲居立有良志」の大きく搖らぐ聲調でやうやく一首をささへてゐるに對して、改作は三句の苗で休止するものの上句全體の流動がこれを觸發の小休止に高調せしめ、よく「苗」の意味と諧調せしめるとともに、下句における「雲立渡」の急迫充滿を現出すべき潜勢として働くわけであるが、したがつて結句に「良志」のごときの入り來る餘地のないことは勿論ながら、全然「良志」の意味を含まぬ斷定と見、すなはち改作全體を單なる前後繼起の關係において見ることもなほ詳しからぬのである。「らし」をそのひとつとする一群の助動詞は由來個人心理的なもの〻表現である、これを生かしながらに切つて捨てた人麿の力量は、「良志」から「苗」への進境のおのづともたらしたことながらもつとも敬禮に値する。「なへに」だけの用ゐざまならば、同じ人麿乃至歌集になほつぎのごとき作もあることである。

黄葉之　落去奈倍爾　玉梓之　使乎見者　相日所念（卷二、二〇九）

橋立　倉椅山　立白雲　見欲　我爲苗　立白雲（卷七、一二八二）

しかしながら、「らし」の推定は確信ある推定であり、「たしかに見さだめながら心のおちゐぬ」（あゆひ抄）ものであるから、人麿のこの「良志」の推定がそれなりに斷定に近く高まることはむしろ自然の勢であると見ることもできる。またこの近似値的斷定はいまかりに斷定とはいつてゐるが、たとへば清明の歌（卷一、一五）の結句「清明己會」の係助詞による斷定とは異なり、かれをこそ斷定といふならば、これはむしろ肯定といふべきものである。清明の歌は歴史的時間の構造をもち（本誌創刊號小稿）この詠雲の二首は足引の改作歌にしてもなほ繼起的時間の構造を超え得てはゐないのであつて、そこに作者が個人を超えた境地に參

入しえたか、なほ個人の心理内にとどまつてゐるかの爭はれない相違があり、人麿のこの作は個人の識閾の極限に達したに近いとしても、清明の歌の作者とはつひに格段の力量差のあることは認めねばならない。

以上のごとく見來るときは、同じ人麿歌集中の

宇治河作歌二首

巨椋乃　入江響奈理　射目人乃　伏見何田井爾　鴈渡良之（巻九、一六九九）

金風　山吹瀬乃　響苗　天雲翔　鴈相鴨（同、一七〇〇）

この併立もなほ偶然ではあるまい。こゝでも私は想像する。この二首も人麿作で、かつ初作と改作との關係と見られないか、しかも詠雲の二首に先行した作ではないか。「秋風」は「アキカゼニ」と訓めば、鴈と配合するにおいてはくどく、またそのために「ニ」助動詞三箇が布置せられることになる點も耳に立ちすぎてあまりに拙であるから、「アキカゼノ」と訓み「山吹」の枕詞（嚴密には序詞である、小稿『結合語格補説』）と見る方がよい。しからばこれは、詠雲における「痛足河」から「足引之山河」へと同じやうな推敲といひうる。もつともこゝでは固有名詞「山吹」が「巨椋」に代つてなほ保存せられたことになるが、これは下句において「伏見」が削られたからであらう。あるいは「金風」は「射目人乃」の轉身とも見られるであらう、ともかく「金風」を枕詞と解することに作歌乃至推敲過程上の無理はなく、この宇治河作歌二首を人麿作とする想定にとつてはあたかもよいのである。しかしながら、枕詞としての「金風」は「足引之」の純一なるに及ばず、またその上句全體を比べても、金風の方はつひに足引の歌に及ぶことができないといふことは、爭へない事實である。こゝに宇治河作歌二首を詠雲の二首の先行作であらうとする根據がある。また、巨椋の歌の「良之」による推定表現の構想が、こゝでも金風の歌の「苗」による其れに推敲せられたと見うるが、たゞしこゝでは「良之」の微妙な省略など行はれず、結句は代つて「鴨」といふ係助詞となつてゐる。詠雲の「良志」の推定はその「苗」において純粹な繼起關係に近く深まつたが、この金風の歌の「苗」も勿論同樣の前後繼起關係に移つてはゐるが、その後續事象に作者自身が介入し來つてをりすなはち作者の心理主觀の詠歎「鴨」があらはにならざるをえず、それだけ純粹に客觀的な繼起關係になりきら

ない。つまり繼起關係の純化度に差があるのである。こゝにも、この歌を宇治河二首を足引の歌の詠雲二首の先行作であらうとする根據がある。ただ金風の歌には繼起的時間構造に對する心理主觀の卽自的な詠歎が入り來るだけ、そこに自然さと素朴なよさがあるために、他にもしばしば類型の歌を見る。

見麻久保里　於毛比之奈倍爾　加都良賀氣　香具波之君乎　安比見都流賀母（卷十八、四一二〇）

山邊乃　御井乎見我氐利　神風乃　伊勢處女等　相見鶴鴨（卷一、八一）

牟佐佐婢波　木末求跡　足日木乃　山能佐都雄爾　相爾來鴨（卷三、二六七）

燒津邊　吾去鹿齒　駿河奈流　阿倍乃市道爾　相之兒等羽裳（卷三、二八四）

これらのなかで金風の歌はもつとも早い期の作かと見られるが、右のごとき類歌がはたして人麿のこの歌の影響によつて成立したかは、にはかにいふことができない。

右に引いた燒津邊の歌の「齒」の表現性は「なへに」に特に近く、同じく繼起關係をあらはすものであるが、詠雲や宇治河作歌において「苗」を用ゐた人麿は、このやうな「は」によつても秀れた一首を作ることができた。すなはち歌集の

卷向之　檜原毛未雲居者　子松之末由　沫雪流（卷十、二三一四）

がそれである。これもその素材を卷向にとつてゐるが、足引の歌、金風の歌のいづれとも異なり、實に純粹に繼起關係にあるその後續事象を肯定陳述した表現となつてゐる。一層適切にいへば、この繼起關係は、しかも原因理由と結果歸結との關係を背後にもちえず、かへつて逆接として順直な推論的關係を超えるところがあり、したがつて「沫雪流」には「者」乃至は「毛」とともに人麿の個人心理における理論を超えた現實としての自然現象に對する斷定にも似た强い詠歎が充實するのである。すなはち人麿の繼起的時間の構造に立つ表現は、こゝに至つてはじめて徹底の域に達したと評することができる。しかもまたこの歌とそのすぐ前に排列せられた

足曳之　山鴨高　卷向之　木志乃小松二　三雪落來（同、二三一三）

といふ作との間に、またしても初作改作の推敲關係を想定しうるであらうことは、ますゝ興味を津々とする。この作の意味は、卷向の岸の小松にみ雪が落つて來るといふ事

實を前提としてそのおのづからの歸結として山（卷向）の高さを感ずるといふのであり、その高い事が一つの疑ひがたい實感をもつて迫る山を背景として現にいまかくも雪がふつて來るといふのである。上二句は第三句以下を原因乃至理由とするその結果乃至歸結である。しかもこの推定の歸結は、さきの詠雲痛足河の歌あるいは宇治河巨椋の歌における「らし」の其れよりも、一段と確信的であり、それが「らし」ならぬ「鴨」によつてあらはされた。そもそも「かも」乃至「か」は「事のうたがひなき中に疑のまじれるをよむ」（あゆひ抄）ものである。係りとしての係助詞「かも、か」のこの單純な疑問でない用法も、特に人麿にのみ見られるといふのではないが、彼れにおいてはそのうたがひなき側面の極度に著しい意味にしばしば使はれ、そこに言語の妙いふべからざるものを發揮することは、さすがに非凡である。右の「鴨」もその一つであるが、またも

卷向の歌

黒玉之　夜去來者　卷向之　川音高之母　荒足鴨疾（卷七、一一〇一）

あるいは同じく歌集所出の

御食向　南淵山之　巖者　落波太列可　消遺有（卷九、一七〇九）

のごときも、もつとも端的にこの妙を味ふべき適例である。從來「足曳之山鴨高」を「山が高いの（から）か」といふごとく單純な疑問の意味に解してゐるのは、たとへば「足曳之山を高みか」のごとき表現と混同した妄解である。もしそれならば、あへて人麿の作といふがものはないのである。さて、かくのごとく見るならば、この足曳の歌は單なる推定關係の境地を超えつつあり、あたかも詠雲の足引の歌に迫るものである。これを初作として推敲改作せられたであらう卷向之檜原の歌が、つひに純粹に繼起的時間の構造に徹した境地に至つたことは、むしろ自然の數であつたと想定して差支ない。「らし」に代つて「かも」のあらはれたことに對應するごとき、「なへに」から「は」への更新といふこと「木志乃小松二三雪落來」から「小松之末由沫雪流」への推敲成績、就中「に」から「ゆ」へ、結句の三四調から四三調への改良といふことも注意せられてよい。なほ、宇治河作歌の場合をも含めて、前後各首の間に固有名詞の差替のあることをもつて、はたしてこれら

がそれぞれ推敲關係にあるかを疑つたりなどする必要はない、歌の推敲とはさうしたものであるからである。

以上のゆゑに私は、足曳と檜原との一組を宇治河作歌に後行したであらう詠雲の一組のその後に位置せしめて見るものである。かくのごとくにして、人麿は個人心理における理論臭を脱しがたい單なる推定關係の構想による表現を超克すべく、人知れぬ苦心經營をしつひにその實をあげた。私は畏敬の念をあらたにせずにはをられない。

さらにいまひとつ、人麿は「らし」と同類の「とふ」といふ助動詞相當語に、さきの詠雲足引の歌においてのごとき省略をあへてして、微妙な表現を遂げた。それは

珠藻刈　敏馬乎過　夏草之　野島之埼爾　舟近著奴（卷三、二五〇）

である。「珠藻苅」はいふなれば「（海人處女）玉藻苅るとふ（らしき）」といふ意味であり、いはば

巨禮也己能　名爾於布奈流門能　宇頭之保爾　多麻毛可流登布
安麻乎等女杼毛（卷十五、三六三八）

この一首の内實に通ふのである。ただし、後者の「登布」は單なる傳聞の推定であり、その觀念的内容がいま現實において事實と吻合することの感動を歌つたものであるが、人麿の不可見の「とふ」は單なる傳聞推定でもなく、さりとて後者のごとく事實との吻合を意味するわけでもない、たま〳〵敏馬を過ぎるといふ現實を機縁として、かねて傳聞推定の智識たるにとどまつてゐた處女の玉藻苅りが實感をもつて聯想せられたのである。人麿は現實に處女を見たのではない、處女としての敏馬を見てゐたにすぎない、たゞその間接的な視界のなかにあつて玉藻苅る處女が實感ある幻像であつたのである。推定の「とふ」はかくして推定がなほ非現實的な傳聞ながらに、現實的な確定肯定に傾斜する氣息において彼れの口中に吸ひこまれ、そこに微妙な聯想の空白を表出したのである。「玉藻苅るとふ」は、もしそれが單なる傳聞推定ならば、後者の歌のごとく「安麻乎等女杼毛」の必然的な屬性として通常の連體修飾の格關係を構成するわけであるが、人麿の歌の「玉藻苅る（とふ）」は、一方においてなほ右のごとき傳聞推定として「敏馬」に連體修飾するが、他方それが確定肯定に近くしてなほそこに至らない聯想内容「玉藻苅る」としては「敏馬」の偶

然的な屬性であり、こゝに「とふ」の省略せられた「玉藻苅る」が「敏馬」と枕詞の格關係を構成することになるのである。（連體修飾の格と枕詞の格とについては小稿『關係構成體としての言語主體』參照）。「この歌においては『玉藻苅る』『夏草の』の二句は枕詞ではあらうが、鑑賞する際にはむしろ實質的な意味を以て働いて來る樣に思ふ。然し實景として強く意識する時には、また一種重苦しさが伴ふやうである。」（藤田清氏、「萬葉集研究」下、九二頁）といふ尤もな僞らぬ感受の告白も、このやうな推定助動詞「とふ」の、自身の意味を內に含みつゝの肯定化傾向が產み出すものにほかならない。

神龜三年笠金村はすでにこの「玉藻苅」の微妙を解しなかつた。ことはつぎの長短歌に露呈してゐる。

名寸隅乃　船瀨從所見　淡路島　松帆乃浦爾　朝名藝爾　玉藻苅管　暮菜寸二　藻鹽燒乍　海未通女　有跡者雖聞……（卷六、九三五）

玉藻苅　海未通女等　見爾將去　船梶毛欲得　浪高友（同、九三六）

また

三吉野乃　象山際乃　木末爾波　幾許毛散和口　鳥之聲可聞

（卷六、九二四）

においてはよく人麿の前掲御食向の作の力量に迫つた赤人が、おそらくはその翌年ぐらゐに當る神龜三年の長歌では、人麿の玉藻苅の歌をそのひとつとする羇旅歌の一連（卷三、二四九——二五六）その他から全般的な影響を見苦しいまで受けてをり、その低調さから推せば、その反歌の「玉藻苅」がはたして人麿の氣息をもつて歌はれたものかは強く疑はれるのである。

味澤相　妹目不數見而……淡路乃　野島毛過……島際從　吾家乎見者……白雲毛　千重爾成來沼……（卷六、九四二）

玉藻苅　辛荷乃島爾　島回爲流　水鳥二四毛有哉　家不念有六（同、九四三）

またさきの鳴門の玉藻苅るの歌は天平八年遣新羅使人の一人によつて作られたものであるが、この一行の人々が右に言及した人麿羇旅歌八首のうち四首までも傳唱してをり、問題の歌もそのなかにあり、すなはち

多麻藻可流　乎等女乎須疑氐　奈都久佐能　野島我左吉爾　伊保里須和禮波（卷十五、三六〇六）

といふ形になつてゐるが、さきの鳴門の作歌とも思ひあはせるとき、この「多麻藻可流」がおそらくは金村赤人流の

誤解を經て「乎等女」にかゝる單なる連體修飾語と心得られたであらうことは勿論、さらにはその「乎等女」も地名であるよりは「安麻乎等女杼毛」の意味に、すなはち「玉藻をかる少女の居る所をすぎて」（土屋文明氏、「萬葉集私見」五九頁）ぐらゐに漫然と感得せられてゐたやも知れないとまで思はれるのである。

人麿の推定表現に關しては以上に盡きるわけのものではないが、こゝでは「らし」「なへに」「かも」「は」「とふ」についてその丹精の微妙をすこしく指摘するにとどめた。

（一九五二年十月八日）――奈良女子大助教授――

「わらば」と「わくらば」

――誤寫と意味の移入による古語誤解の一例――

井手至

一

萬葉集に、湯原王が娘子に贈つた歌として

玉爾貫　不令消賜良牟　秋芽子乃　宇禮和和良葉爾　置有白露（卷八・一六一八）

といふ歌がある。第四句「うれわわらばに」の「うれ」は「若末」（卷十・二一〇九）の意であらうが、「わわらば」については、この語が集中ここに見えるだけの難解語である

ところから、諸註釋書の釋くところもいまだ定説とすべきものを見ない。その主なものを拾つてみると次のやうになる。

①若葉（代匠記初稿本、童蒙抄、考所引奥人説、倭訓栞）
②破れそそけた葉（代匠記精選本、古義、全釋、藤森氏總釋、私注）
③わさわさと繁つた葉（宮地春樹私考）
④露の繁く置き亂れた形容（考、略解）
⑤若末の打靡いてゐる形容（井上氏新考）

⑥未詳（窪田氏評釋、全註釋）

異説は多いけれども何れも檢討批判するまでもなく取るに足らない。ただ、傾向としては、

……綿毛奈伎　布可多衣乃　美留乃其等　和和氣佐我禮留　可可布能尾　肩爾打懸……（卷五・八九二）

に見える「わわく」を「わわらば」に關係づけた比較的通用してゐる②の解釋を含めて、古くより「わわらば」を或種の「葉」と解するものが多いといふこと、更に現代では、確實な根據を摑むことが出來ないながらもその解釋が「ある狀態に於ける葉をいふらしい」（全註釋）といふところに落着きかけてゐるといふことが注意されるだけである。かくて、「わわらば」の眞義に到達し得た解釋は殘念ながら今のところは皆無といふべく、この語は依然として未解決のまゝに殘されてゐる現狀であるが、果して、「わわらば」はそれほどに難解な語であつたのであらうか。

二

「わわらば」に類似した語に「わくらば」といふ語がある。「わくらば」は

わくらばに相坂山のさね葛くるを絶えずと誰か頼まむ（新勅撰・卷十三・八五九）

等の如く使はれ、「稀」「たまさか」の意があるとされてゐる。「わくらば」にそのやうな意味があるとしたのは、古くは「能因歌枕」で、そこには

希ことをは（マレナル）、わくらはといふ、たまさかとも（略本）

とあるが、「わくらば」といふ語を語構成の上から考へてみると、さういふ意味は、既に派生的、轉成的の意味であると考へられ、少くともその語の發生的な意味ではなかつたと思はれる。

上代までは、なほ「寒等」（卷九・一八〇〇）「伊豆良」（卷十五・三六八九）等に見られるやうな接尾語「ら」と共に、「布都麻」（卷十八・四〇八一）「刀比止麻」（續紀宣命・第七詔）等に見られるやうな接尾語「ま」が屢々使用されてをり、

奴婆多麻乃　欲流見之君乎　安久流流安之多　安波受麻爾之豆　伊麻曾久夜思吉（卷十五・三七六九）

といふ用例などを見ると、接尾語「ま」は當時まだ幾分かは生産力を殘してゐて、或情態を意味する語を形成する機能を有してゐた接尾語であつたといふことが知られる。[註1] こ

の接尾語「ま」はまた、「ば」と表現されることもあつたらしい。

加敝良末爾　君社吾爾　栲領巾之　白濱浪乃　緣時毛無（巻十一・二八二三）

に於いて「かへらま」と見える語が

曉之　朝霧隱　反羽二　如何戀乃　色丹出爾家留（巻十二・三〇三五）

に於いては「かへらば」となつてゐるのである。一般に、〔m〕音（有聲兩唇鼻音）と〔b〕音（有聲兩唇破裂音）とは互に似通つた子音であつて交替する可能性が認められ、古くより、

阿牟（雄略記）――虹　アブ（名義抄）
麼、床　支美（新撰字鏡）――黍　キヒ（名義抄）
宇萬良（萬葉集巻二十四三五二）――棘　宇波良（新撰字鏡）
燈　トホシビ（名義抄）、戍　マホル（名義抄）

等のやうに〔m〕音と〔b〕音との交替した例さへあるところではあり、今の場合の音韻交替も支障なく認められる現象であらう。[註2] かくて、接尾語「ま」と「ば」とが全く同意義、同機能のものであるとすれば、「わくらば」についても、その「ば」は、接尾語「ま」と等價の接尾語「ば」であると見て、語構成の上で「わくらば」と先に擧げた「かへらま」乃至は「かへらば」とを同一線上に並べることが可能なのである。[註3] さて、「かへらま（ば）」は、動詞「却る」と關係を持つた語で、「かへらま（ば）に」が「却つて」「反對に」等と譯されてゐるやうに要するに翻覆された情態を意味すると考へられるが、同樣に「わくらば」の方も、「都由和氣奈加牟」（巻二十・四二九七）等と用ゐられてゐる動詞「別く」（下二段活用）と關聯した語で、發生的には、他と區別せられた情態を意味する語であつたと考へられるのである。その意味では、數ある古今集の註釋書の中で唯一つ、香川景樹の「古今集正義」が

わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻鹽垂れつつわぶと答へよ
（巻十八、九六二）

に於ける「わくらば」をこのやうな意味に解してゐる[註4]のは、古今集中の用例を發生的な意味で解釋することの當否は別として敬服に價する。ところで、以上の考察が是認されるとすれば、

……和久良婆爾　比等等波安流乎　比等奈美爾　安禮母作乎……
（巻五・八九二）

人跡成　事者難乎　和久良婆爾　成吾身者……（巻九、一七八五）

に見える萬葉集中の「わくらば」の用例は、諸註釋書何れも、無反省に古註を蹈襲して「稀」「たまさか」の意に解してゐるけれども、少くとも當時はなほ接尾語「ま(ば)」が生産的に働いてゐたことを考慮に入れて、發生的な意味で「取りわけて云々」と解釋を施した方が妥當なのではないかと思ふ。

ところで、この「わくらば」といふ語は、中世以降、急に或種の「葉」の意味をも持ちはじめた。當時の句に

わくら葉に拾ふ貝ある海松めかな　宗牧（爪木）

といふやうなもののほかに

わくら葉は秋風またぬ木の間かな　紹巴（同右）

といふやうな句があるが、當時の辭書、註釋書類を見ると、「わくらば」を

①嫩葉（易林本節用集、等）

②わづかに生ひ出でた草葉（京大本古今祕註抄）

③夏木立の中の紅葉、轉じて病葉（虫蝕ひ葉）、去年の古葉の殘、等（古今童蒙抄、冷泉家古今集聞書、日葡辭書、和歌吳竹集、產衣、雅言俗語翌檜、等々）

「わわらば」と「わくらば」

の如く、大別して凡そ三種の葉の意味に取つてゐる。[註5] 更に後には、「稀」の意の場合と「葉」の意の場合とを「――ば」の清濁によつて讀み變へて「わくらば」といふ語を二つに區別して使用しようとさへしてゐるが、[註6] 一體如何にして右のやうな「葉」の意味が「わくらば」に生じてきたのであらうか。一般に、語義の不明となつた文語の解釋や死語の復活の場合には、その語の有する或音節が惹き起す素朴な聯想的意味が強く働く。「わくらば」に「葉」の意味が生じてきたのは、「わくらば」といふ語の最終音節「ば」に「葉」の意味を聯想し、移入したからではなかつたらうか。それは、當時「わくらば」が既に死語と化して、文語（歌語、文章語）としてのみ使用せられてゐたことを思へば十分に可能性のあることである。かくして、音の類似から①の葉の意味[註7]が、稀だといふところから②や③の葉の意味[註8]が考へられたのであらう。しかも、中世以降は國語に漢字を宛てて書くことが廣く行はれた。「いろは」が「色葉」、「てには」が「天葉」等を表記せられてゐる。先に擧げた宗牧の句の表記にも見られるやうに、「稀」の意の「わくらば」の「ば」に「葉」字を宛てることも、その當時から

「わわらば」と「わくらば」

あつたことであらう。さうとすれば、それは視覺的にも「わくらば」を或種の「葉」だと解釋する方向に一層拍車をかけたであらうと想像される。

さて、この邊で再び「わわらば」といふ語の方に立ち歸ると、ここに思ひ合はされることは、諸註釋書の大半が「わわらば」といふ語を或種の「葉」の意味に解釋してゐたといふことである。思ふに、「わくらば」について、或種の「葉」だと解釋せられる可能性が十分に備はつてゐたと前述したことは、同時にそのまゝ「わわらば」についても言ひ得るのである。その上、「わわらば」の解釋に當つては、既に或種の「葉」を意味する語として文藝の世界で使用せられてゐた「わくらば」といふ語が、「わわらば」との語形の類似から、暗々裡に近世以降の萬葉の諸註釋家の腦裡に強く働きかけたであらうといふことも忘れてはならない。しかし、「わわらば」の場合は、「わくらば」の場合とは稍異り、一層視覺的に「葉」であるとの解釋が下されたのであらう。それは、「わわらば」といふ語の表記が「和和良葉。」となつてゐたからである。萬葉集中には「葉」字が表音的用字群の間にあつても、表意文字として「宇良葉。」（巻十四・三五〇四）、「毛美知葉。」（巻十五・三七〇〇）、「波幡蘇葉。」（巻十九・四一六四）等の如く用ゐられてゐる。それは先入觀念となつて「和和良葉」といふ用字を見れば、當然その「葉」字は「葉」の意味を表したものであらうと考へてしまつたのである。かうして、多くの解釋は「わわらば」を先づ或種の「葉」であらうと安易に考へて出發し、すべて迷路に蹈み入つてゐたのであつた。丁度、中世以降の人々が、「わくらば」を一方では或種の「葉」をも意味する語だと誤解してゐたやうに。我々はここに改めて「わわらば」といふ語について根本的に檢討しなほさなければならない。

三

そこで、先づ冒頭に掲げた萬葉の歌の第四句の本文について諸本間の異動を檢すると、無點本以下の版本には「宇禮和和良葉爾」とあるけれども、古寫本には細井本を除いては諸本一致して「宇禮和〻良葉爾」（但し、紀州本には「葉」字が脱落してゐる。）となつてゐる。こゝで、版本に「和和良葉」とある本文が、古寫本に一致して「和〻良葉」となつ

てゐることは見逃してはならない。實に難解語「わわらば」解明への端緒はこの所に存するのではなからうか。

一般に、重點「ゝ」は「之」字「久」字の草體と字體が近似し、古寫本を見てもこれらの文字相互間の異動は屢々見出される。例へば、元暦本、類聚古集、紀州本を見ると

……靡見　時者來ゝ（卷十・二〇一三）

とある重點「ゝ」が、西本願寺本以下の諸本には「之」字に誤られてゐる。反對に、諸本に

淡海之海　浪恐登……（卷七・一三九〇）

とある「之」字が、紀州本には重點に誤つて書かれてゐる。これは、古寫本に於いては重點と「之」字の草體とが極めて近い形に書かれることがあつたためである。「之」字はまた草體の「久」字と似てゐた。

……世武爲便不知　哭耳之曾泣（卷四・五一五）

の「之」字が、金澤本に「久」字に誤られてゐたり、逆に

……海底　奥津伊久利二……（卷六、九三三）

の「久」字が、元暦本に誤つて「之」字の草體に近い字體に書かれ、改めて「久」と書き直されてゐるやうな例を見出すことの出來るのはそのためである。かくて「之」字の草體に似た「久」字の草體は當然重點にも誤られ易かつたわけで

夜麻扶枳能　之氣美登毗久久　鶯能……（卷十七・三九七一）

の「久」字が、類聚古集に重點「ゝ」に誤られてゐる例を拾ふことが出來るのである。以上擧げたところはほんの一例にすぎないが、このやうにして、重點と草體の「之」字「久」字の三者が相互に寫本の際に書き誤られ易かつたといふことが認められるならば、卷十三の三二七二番の本文

……親之　己之家尙乎……

の傍線を施した文字について諸本間に見える異動を基にして推定せられる誤寫過程、即ち

親之（類）→親ゝ（天、元、紀、西、細、溫、矢、京）→親親（無、附、寛）

を參考として、「和和良葉」といふ本文も、同樣な過程、即ち

和久良葉（推定本文）→和ゝ良葉（類、紀、西、溫、矢、京）→和和良葉（細、無、附、寛）

の如き誤寫の過程を經て、今見るやうな形に誤り傳へられたものではなかつたかと考へられるのである。いふなれば「わわらば」といふ語は存在しなかつたのである。「わわ

「わわらば」と「わくらば」

らば」はもと「和久良葉」とあつた、即ち正しくは「わくらば」である。「葉」字が用ゐられたのは「秋芽子乃宇禮」とあるのに應じた一種の聯想的用字[註9]と見られる借訓の文字であつて、意味と無關係であることはいふまでもない。然らば、かくして第四句が「宇禮和久良葉爾」と復元出來るならば、その場合も、「わくらば」といふ語は他の萬葉集中の二例と同じく、「わくらばに」で「取りわけて」の意を表すのであつて、この場合は、白露が秋萩のうれに特に際立つて置いてゐる光景を表現したものと見ることが出來るのである。

以上、難語「わわらば」が最もありふれた誤寫過程を經て傳つた本文に基づいて訓讀せられた人造語であつたといふこと、そして、その「わわらば」が、「わくらば」の解釋においてもさうであつたやうに、一般に或種の「葉」であらうと無反省に考へられてきたことがその最大の原因となつて、誤寫の存在が今日に至るまで看過せられてきてゐたといふことを指摘し、これを復元した次第である。

（昭和二十八年五月十日稿）

註1　阪倉篤義氏「接尾語ラマの考―書紀の古訓をめぐつて―」國文學昭和二十六年二月。

註2　有坂秀世博士『國語音韻史の研究』四一一頁―四三七頁。

註3　武田祐吉博士『國文學研究―萬葉集篇』「反羽二」の項に「ワクラバニは或は類型の語かと考へられる」（二一三頁）とある。

註4　「古今集正義」には

わくらははわきてと云意也、わくは即わき也　らはは古へそへて云るる詞と見えて宣命にみことのらまとあるも同しきなり

とあり、揖取魚彦の「檜乃嬬手」に繼承されてゐる。

註5　「わくらば」は、更になほ連鎖（enchaînement）的意味變遷をつづけ、「ひさぎ木」等、若葉が紅色を呈する木の名ともなつてゐる。

註6　古今集の「わくらば」について、寂惠本古今集や古今訓點抄にはまだ濁點符が附いてゐるが、毘沙門堂藏古今集註には「ワトモヨムヘシ」とあり、古今童蒙抄にも「このわくらはをわくらわとよむ人あり」と注意してをり、當時は讀み方に混亂が見られるが、國立國會圖書館上野分館藏言塵集に至れば、もはや「は文字をにごるべからず」とし、現代でも謠曲ではその中に引用せられた古今集歌の「わくらば。」を「ワ。」と讀みならはしてゐるが、これは、萬葉集中の「わくらば」について見ても、代匠記初稿本に「はの字昔は濁てよみけるなるへし」とあつて、その當時は既に淸んで讀んでゐたことを暗示し、考は「比婆和の如く唱べし」

としてしまつてゐるのである。即ち、當時「稀」の意と考へられた「わくらば」は清んで「――は（わ）」の如く讀み、「葉」の意の「わくらば」（即ち「――ば」）と區別してゐたのである。

日葡辭書に

Vacuraua. p. i. Marena. *Coufa rara*

Vacuraba. *Folhas comidas do bicho na fexia lua.*

と區別して誌され、また、田中常矩の「古今和歌集講義」（京大附屬圖書館藏寫本）に頭註して

若葉（ワカハ ワクラバ）　木の葉落て後古ありし處に若葉すこしわわけるもの也ゆへにかりそめすこしたまさかなといふ心をワクラバと云し也後に清濁をつけてすむ時はたまさかなとの義理にしにこる時は若葉の事と用たり

病葉（ワクラバ）　此時は五六月の比也ば古葉のこりてあかくなりやまひ付きたるをいふ也是も少ありてたまさかのもの也　にこりていふ時はやまひ葉の事也

とあるのは、それを明瞭に示してゐる。

註7　倭訓栞に

一說に嫩葉といふ、わか葉の義、くらの反か也といへり

とあり、古くより反切が語の解釋に用ゐられて

蚊……クラヲ反セバカ也闇夜ニトビキタリテ、人ノ血ヲスヒクラヘバクラノ反ヲトル也……（名語記二帖）

社コソ此和語ハ門代（カドシロ）ノ反也。……（拾遺采葉抄）

等とあるのを見れば、或いは反切で「くら」の反「か」と「わわらば」と「わくらば」と「わかば」とを同一視したのかとも考へられるが、「わわらば」を「若葉」と解釋したものもあつたやうに、この場合もやはり音の類似から生じた意味であらう。

註8　京大本古今祕註抄に

……又分葉とかきてわくら[は]とよめりけれはわつかにおひいてたる草葉な[り]まれ[な]る心に申也

とあり、古今童蒙抄に

……又夏木立の中にもみぢたる葉をわくら葉といひなし侍れば。たまさかなる心にもかよふべきにや

とある。

註9　武智雅一氏「萬葉集に見える聯想的用字」文學昭和八年十一月。

附記　本稿の大要は第二回萬葉學會研究發表會（於東北大學）にて發表した。

――京都大學特別研究奬學生――

「何時邊乃方」考

野中春水

秋田之穂上爾霧相朝霞何時邊乃方二我戀將息（卷二、八八）

右は萬葉集卷二、磐姫皇后思天皇御作歌四首中の一首であるが、この中の「何時邊乃方」の訓について私見を述べたい。校本萬葉集によつてこの箇所の文字遣ひを見ると、神西金細溫類矢京無附の諸本すべてこの通りであり、文字面の上で特に注目すべきこともない。ところがこれをいかに訓解するかについて、普通廣く行はれてゐるのは「いづへのかた」又は「いづべのかた」（次項(い)及び(ろ)）とよみ、意義としては共に「いづれの方に」と解してゐるのである。試みに諸書の取扱ひを整理すると

(い)「いづへのかた」

古義、新考、講義、全釋、總釋（卷二土屋）評釋（金子）秀歌、全註釋、私註、新訓、分類、年表、新校、定本、正訓、朝日古典

(ろ)「いづべのかた」

考、楢の杣、略解、攷證、鑑賞と批評（赤彦）新釋（澤瀉）年代順作者別

(は)「いつへのかた」代匠記

(に)「いつべのかた」國歌大觀

(ほ)誤字說、童蒙抄「邊」は「處」訓「イツク」又は「イツコ」

といつた狀態である。(に)は意義の取り方は不明であるが、ともかく(は)の契沖說以外においては、これを「どちらの方向」といつた方角をさしたものとして說かうとしてゐる。ところで私は大體三つの觀點から、むしろこれは時間的な面が中心になるのではないかと考へるのである。卽ち「何時」は「いつ」とよまれるべきであつて、そこに時

の性格を考へたいのである。

これを方角的なものにとつたのは後述するやうに眞淵の意見が大きな役割を果してゐるのであるが、古く長流も「いづくの方なり」（管見）と方角説をとつてゐたのである。ところが契沖は

邊ノ方トハ渺々ト見エワタル田ノ其カタハラナリ……霞ハカタヘニ晴行コトモアルヲイツカ我モソノコトク胸ノ晴テ戀ノ止マンヅトナリ（代匠記、精撰本）

との新説を唱へ、「いつへのかた」と「へ」を獨立せしめたのである。更に次に、こゝに疑問をもつた宣長は師、眞淵に次のごとく質問したのである。即ち「萬葉問目」にあ

此歌の意いかが侍らん、何時邊乃方とは卷十九にほとゝぎす伊頭敝能山乎云々といへるは何方の山をと云意にきこえたればこの何時邊も時の借字にて何方と云意か、それならば朝霞のはれぬを戀の心のはれぬに比して何れの方にはれむとよめるか、又文字のまゝに何時と云意ならばいつかわが戀のはれむと云意か

との問である。ところで眞淵は

上の考よし、下の考にてはべと方との語いかにいはんと答へ、かつ、「萬葉考」においても

何時邊乃方　何れの方と書くなり、卷十九にほとゝぎす伊頭敝能山乎鳴か越ゆらんと有もて禮を邊に通はせいふを知る

と述べたのであり、この眞淵説が有力な勢となつて以後の學者も殆んどこれに從ひ、由豆流の攷證にも萬葉考の説をあげて「……と云はれしごとし」と結んでゐる。「いつ」を時間と考へた契沖説はもはや顧みられずに今日に及んでゐる。この小稿においては、この契沖の「いつ」説を支持し「へのかた」との結びつきに、いま一つの考慮を拂つてみたいのである。

さて、この句を時間的なものにとるといふ第一の根據は、第五句、我戀將息との結びつきである。戀息むとは戀の終止であるが、このやうな表現のある歌では、つねに時を背景にしてゐることである。「いつの日」とか「これこれの時」などと時を頭に畫いたものばかりであつて、どこそこで、或は、どちらの方で戀が息むといつたものは見られないし、またさういつた詠歎が不自然なやうにも感ぜられる。集中の用例を見ると

わたつみの海に出でたる飾磨川絶えむ日にこそ吾が戀や

まめ（三六〇五）

久かたの天つみ空に照る月の失せなむ日こそわが戀やまめ（三〇〇四）

あらたまの五年經れど吾が戀の跡なき戀のやまず怪しも（二三八五）

その他一九一〇、二六三二、二六七〇などが見られるが、少くともこの戀やむといつた場合には必ず時の觀念がつきまとつてをり、又それが自然である。その證として山田博士の口譯をあげることができる。即ち山田博士も「何時邊乃方」をやはり方角をさすものとして、「講義」の語釋の條においては「今の語にていへばイヅカタといふに同じ意」と明確に述べられてゐるのであるが、口譯の所では

……その朝霧とてもいつしか何處ともなく消え失するにわが戀の思ひの苦しさはいつ如何にして消え失すべきか……

と記されてゐる。勿論これは心境を充分に表現されたが故であらうが、少くともそこに、いつしかとかいつとかの時の要素が自らこの歌に要求される證據となるであらう。又この點については、井上博士も疑をもたれ、「新考」において將息は將遣の誤ではないかとの誤字説を出されてゐる。誤字とすればその結びつきは滑らかにも考へられるが、俄かに誤字と斷ずるのも他に有力な資料のないかぎり躊躇されるのである。

第二の根據として考へてみたいことは、この歌を含む磐姫皇后御作歌の一連である。この四首の歌が眞實、皇后の御歌でないことはつとに云はれ、わけても澤瀉先生は

事實は仁德天皇の頃のものでなくして、後人の作がこの樣な傳説を伴つて傳誦されるやうになつた（傳誦歌の成立――「萬葉の作品と時代」所收）

とされ、更に

萬葉編纂以前に傳誦のうちに改作されたものであり、一連の連作の形をもつて皇后の御作として萬葉編纂者に傳へられたものであらう（同前）

と述べられてゐる。又山田博士も「一團の歌として見るべし」（講義）と説かれてゐるやうに、この四首は連作の形をとつてゐるのである。そこで一連の歌として、これらの歌

君がゆきけ長くなりぬ山たづね迎へか行かむ待ちにか待たむ（八五）

かくばかり戀ひつつあらずは高山の磐根しまきて死なま

しものを（八六）
ありつつも君をば待たむうちなびくわが黒髪に霜のおくまでに（八七）

を見るとき、そこに強く「再び相逢ふことを期待してゐる心境」が流れてゐることが考へられる。即ち再び相逢ふことによつて、わが戀はやむのである。その心境は、まさに

まそ鏡たゞにし妹を相見ずは我が戀やまじ年はへぬとも（二六三二）

外目にも君がすがたを見てばこそ吾が戀やまめ命死なずは（二八八三）

及び二九五八などに見られるものである。このやうに、相逢ふことによつて戀がやむといふ心があればこそ、相逢ふ日を期待し、逢はんと努力する心があふれてくる。だからして、「ありつゝも君をばまたむ」とか「迎へか行かむ待ちにか待たむ」などと歌はれてゐるのである。かうした心境において、「わが戀やむ時」はいつ頃であらうかと反問し、歎息するのは當然の勢であらう。かうした連作の形をもつた一連の中の一首と見るとき、何時邊乃方は時間的なものと見るのが自然であると考へられる。

次に第三の點は文字面からの檢討である。即ち、集中「何時」と書かれた場合はつねに「いつ」とよみ、意義においては時間的なものを示してゐることである。この例としては

何時跡知而加（一四〇）　何時可將示（二七九）
何時毛將有乎（四六七）

その他五十五例がある。この「何時」の外に

伊都　伊都斯可母（八八六）　伊都可伊多良武（三四四一）
何　何畢（二四四七）
射　射然汝主（二五〇三）

があるが、これらはすべて「いつ」であり、時間的なものを表してゐる。これに對して一方、不定の場所或は方角を示すものとして、

伊豆久　伊豆久欲利（八〇二）
何所　何所行良武（四三）
何處　家八方何處（二八七）
何　何爾加君之舟泊（一一六九）
伊豆　伊豆由可母加奈之伎世呂我（三五四九）
伊豆良　伊豆良等和禮乎（三六八九）

何在　何在登問者（四四八）
伊豆知　伊豆知武伎提可（八八七）
伊都知　伊都知由可米等（三五七七）
伊頭敞　伊頭敞能山乎（四一五九）
何方　從何方君（一三〇八）

といつたものがあるが、これらと一線を畫して「いつ」の一群があるのである。しかも「何時」と書いた時に、「いづ」でなく「いつ」であるべきことは

河上の伊都藻之花乃何時何時來ませ我が背子時じけめも（四九一）（一九三一）

がある、この第二、三句は同音の繰返しによる序詞で、伊都藻は「いづも」とは濁らない。自ら「何時」は「いつ」である。又、射然汝主の「射」は時間的な意をもつてゐるのであるが、これはあくまで「いつ」であつて「いづ」はない。とすると

1「いつ」といふのは時を表す言葉である
2「何時」は「いつ」とよんでゐる

といふことになる。ところが次の「邊」と「方」とについてくことにおいて方角的なものが考へられ「いづく」「いづこ」の假名に用ゐられたことが考へ出されたのである。

萬葉假名の使用が大きな幅を持つてゐることは清濁の點にも云ひ得ることではあるが、元來、清音のものが濁音に轉用される場合には他音との連結上行はれるのが多い。即ち連濁である。もつとも一字一音のもので兩方に用ゐて、津―虛見津（一）魚津佐比去者（五〇九）、都―加萬目立多都（二）可多知久都保里（九〇四）といつたものもあるが、次のやうに複合語による連濁現象が普通である。

頰―目頰染（一九六）　積―名積來之（二一〇）
盡―馬爪盡（二四二一）　衝―氣衝明之（二一〇）

これらのものは、他の語と熟合したとき濁音になる可能性をもつ語である。同じく、量の字は他の語と熟合した時に、「ばかり」となり得る、この「ばかり」を助詞の「ばかり」に用ゐて、是量戀物知者（二三七二）ともあらはしてゐる。かうした用法は見られるが、「何時」とかいて「いづ」とよむとするのは、これらとは性格が違ふのである。「い」と「づ」との分離は考へられないのである。しかし、この清濁の點は今なほ決定的な論を下すことはできないが、「何時」を素直によめば「いつ」であり、これを「い

づ」とよんでゐる理由は、要するに萬葉考以下諸書に引用してゐる卷十九の「伊頭敝能山乎」（四一五九）がある故である。しかし、たゞこの一例によつて前述の諸根據を無視せねばならないだらうか。要は「邊」と「方」である。こゝに時間の要素を考へる餘地がありはしないだらうか。

「邊」は　(1)奥に對する邊―海原の邊にも奥にも（八九四）等　(2)あたりの意―しきたへの床の邊（九〇四）等のやうに大體場所を示してゐることが多いが、時間的なある限界を示すこともあり得るのではないか。「いにしへ」は「往にし邊」であり、「ゆふべ」は「ゆふの邊」である。或は先述の「伊頭敝」の「敝」は四四八八に「鶯のなかむ春敝（はるべ）」と用ゐられ、しかもこれは明かに時の性格をもつてゐる。これらのやうに時の要素を見得るとするならば、ここに

眠をもねず吾が思ふ君は何處邊に今夜誰とか待てど來ませ

さぬ（三二七七）

の何處邊に對して何時邊といふ語が成り立つても不思議でないと考へる。即ち「いつごろ」の意である。

次に「方」である。これも集中には方角を中心にして「白雲のたなびく山の方西有良思」（五七四）とのやうに用ゐられたのが普通であるが、これもまた時間的な要素をもつ語と見ることも可能でありはしないか。「明け方」「暮れがた」「朝方」の「方」は時の程度、限界を表すものである。かういつた點を補足するものとして

さよふけて夜中乃方爾おぼほしく呼びし舟人泊てにけむかも（一二二五）

をあげたい。この第二句については他に

1夜中を度中の誤字とし舟の出入口とする宣長の説　2夜中を地名とする説　3方を潟とする説

があるが、眞淵、契沖、千蔭は、素直に時の意にして、夜中に近い頃を漠然といつたとしてゐる。このやうに方を時間的なものと考へ得る餘地もあり得るのである。さて、かうした場合、「いつべ」と「かた」との結びつきであるが、これは所謂、「かりほの庵」「眞玉手の玉」といつた疊語の樣式であり、その結合は可能である。

われのみや夜船はこぐと思へれば於伎敝能可多爾かぢの音すなり（三六二四）

の「於伎敝能可多」が方角場所を示してゐるものではあるが「へ」と「かた」との結合の例である。

かうして、「何時邊乃方」は「いつべのかた」と訓み「朝霧のやうにはれやらぬこの胸のおもひはいつごろともなればはれることだらうか」と解くことは可能でなからうか。かうして前述の根據も滿足されると思はれる。

最後に契沖説について述べたい。「何時」を時間的なものにとつてゐる點に私見は恩惠をうけたわけであるが、「へ」を獨立せしめた點に異論がある。「へ」を單語に用ゐた場合は海の奥に對する邊である。これを「田のかたほとり」にもつてゆくことが、その田がひろびろと果しないものにしても唐突な感じがする。がそれはともなく、歌の形からいつて、「いつ　へのかた」と句割れになつた使ひ方が「いつ」を用ゐた用例から不自然である。「いつ何々する」といふ形は

いつきまさむ―ゆきし君いつきまさむ（三三一三）その他三二五七、三三三三、三八九七、四四三六

いつかへりみむ―吉野の川をいつかへりみむ（一七二〇）

といつたものがあるが、これらは「いつ」に直ちにその被修飾語が結びついてゐるのである。「いつ」と被修飾語が離れてゐる場合は「いつか」「いつかも」「いつしか」『いつしかと」「いつしかも」「いつとかも」といふやうな形になつてゐるのである。かういつた點からも不自然であると思はれる。

――神戸大學助教授――

「捄手折」考

竹岡正夫

〔A〕九1683　妹手取而引與治　捄。手折　吾刺可花開鴨（人麿歌集）

一

〔B〕九1704　捄。手折　多武山霧　茂鴨　細川瀬　波驟祁留（同右）

〔C〕十三3223　……水枝指秋赤葉……引攀而峯文十遠仁　捄。手

折　吾者持而往　公之頭刺荷　（作者未詳）

右の萬葉の歌の「採手折」については舊訓以來ウチタヲリと訓まれてゐて大體疑問もない樣に扱はれてゐる。例へば、これをウチと訓む事について些か說を加へてゐるものを二、三あげると。

「採は土を盛る、又は長い貌で、打つといふ意はない。代匠記精撰本にナガタヲリともよむべしと言つてゐるが、ともかくウチと訓まねばならぬやうである。……なほこの字義については考ふべきである。」（全釋）

「採は新撰字鏡に『採、擧隈反、盛土也、法也、累也、採也』とあつて、ウチと讀むべき根據がないが、他にも卷九、一七〇四、卷十三、三二二三（歌は略）とあつて、ウチと讀むべき事は決定的である。常に採手折の形で使用されてゐるに依れば、採の義に依つて、熟字として使用してゐるのだらうか。」（全註釋）

「ウチタヲリ、ウチは接頭辭である。『採』をウチに用ゐたのは說文に『盛土於桮中也、一日捊也』とあり、捊は集韻に『與掊同』とあり、掊は集韻等に『擊也』とある字であるから、總て通じて『採』をもウツに用ゐたものであらう、文字の本義からすればその通用が正しいか否か今判定する力がないが、ウツに用ゐたことだけは確かである。文字に詳しくない日本人のこと故、かうした便宜用法も敢てしたものと見える。『採』に『長貌』といふ意があつてもナガタヲリでは意をなさぬ。」（私注）

拾穗抄、童蒙抄、考、略解、古義、新考、新訓、定本、新校、すべてウチ（又はウツ）タヲリ（又はタヲル）と訓んでゐる。

ところが、全釋の說にもある通り、採にはウツ、ウチといふ意はどうしても認められないのであつて、そこになほ疑問を挿む餘地があり、私注の如く「文字に詳しくない日本人云々」といふ見方も出て來る。

一方、萬葉の用例を見ても、「手折」といふ語に着けて用ひられる語は、右の三例の外には、

〔D〕十七3943　秋田乃　穗牟伎見我底利　和我勢古我　布佐多乎里家流　乎美奈敝之香物　（天平十八年大伴家持）

〔E〕八1549　射目立而　跡見乃岳邊之　躑躅花　總手折　吾者持將去　寧樂人之爲　（紀鹿人）

のフサ、總が各一例づゝあるのみであり、ウチタヲリと

訓むべき確證となる用例は見られない。

そこで此のウチタヲリと訓む説に對する異説も出て來る。その代表としてあげるべきは代匠記の契沖と、柿本人麿評釋篇下の齋藤茂吉氏とである。契沖は

「今按、字書ニ依ニ捄ニ打ノ義ナシ。韻會尤韻云、渠尤切、長貌。詩有ニ捄棘七。又渠幽切、長也。又虞韻、恭于切。説文、盛ニ土梩中一也云々。此ノ後ノ義ハ今ノ所用ニアラズ。長也ト注セルニ依テナガタヲリト讀ムベシ」

といふ説を出してゐる。齋藤氏は、

「捄に就いて少しく追記するに、玉篇に捄居于切とあり、蘁也ルヰ、ラは土を運ぶ籠で、フゴ、モッコのたぐひであるが、一面蘁は藷に通じ、藷は植物のカヅラ(藤)でもあり、唐書に攀レ藷而上があり、攀にヒクの訓があるから、それ等からの關聯でタグル意にもなるだらうか。また一方、捄は捋に通じ、捋は取、采に通じ、指先(ゆび)を以てつまみ取る意があり、詩、周南に采ニ采芣苢一薄言捋(トル)レ之とある。また類聚名義抄にはアツムの訓もある。さうすれば、捄手折をばヒキ・タヲリ、或はトリ・タヲリと訓んではどうであらうか。……併し、捄手折は古寫本の殆ど盡くがウチタヲリと訓んでゐるし、妹手取而引與治といつてトルもヒクも含まつてゐるので具合が惡い。さうすれば矢張り、ウツといふ訓でなければならぬのに、捄にウツの意がないとせば、縱ひ萬葉に用例が三つあつても、誤字ではなからうかと想像することも出來る。若し誤字だとすると、天治本新撰字鏡卷十に捄、捄捄、といふ字があつて三形同存沒反手指頭髮也、擊也、トラヘル、テニモツ、ヌキトルといふやうな意があり、注の擊也はウツであるから、捄は捄の誤で古來ウチタヲリといふ訓をそのまま傳へてゐたのではなからうか。……

次いで山田孝雄博士の教示をあふいだ。博士はウチタヲルが不適切なら、或はフサタヲルと訓んではどうか。この場合のフサはニギル意であると言はれた。その根據は大體次の如くである。……爾雅釋木の注に、椒茱萸皆有捄々實也とあつて、捄々は一に莢々に作つてある。莢は蜀椒で佐(サ)はニギル意(捄々)であらう。そこで捄手折をば、フサタヲルと訓み、ニギリタヲルの意としたならばどうであらうかといふのである。博士のこの新訓を學界に提供することとした。」

(二二一頁以下)

さて、今、誤字説は、「捄」の字にはたゞ先の〔C〕の歌の「捄」と書かれたのがあるだけで、他には文字に異同もなく、A、B、C三例とも「捄」であるから考慮外に置く。さうすると齋藤氏の説で取上げられるのは、御自身まづいがと言つて居られるヒキタヲリ、又はトリタヲリのいづれかといふ事になる。又山田氏のあげて居られる説も、氏の擧げられた用例からだけでは尚稍不十分といふ感を持たざるを得ない。

(二の一

此處に、この「捄」の訓と義とを決定するに際して、當時の我國での萬葉以外の使用例があれば、最も參考となるのは言ふ迄もない。ところで今、手本にある寧樂遺文を見てみると、その使用例が存在するのである。それは、當時の計帳や奴婢帳の中で、記錄されてゐる人々の名、年齡、身分等をあげてその下にその者の目印となるべき身體的な特徴が、耳、鼻、口、目、などと共に手に關しても多く記されてゐるその中に、特に手に關するものに見られるのである。今、論を進める都合上、大體一個の計帳、又は奴婢帳その他から、手に關する記錄のみを全部ぬき出して分類してみる。

(1)越前國江沼郡山背鄉天平十二年計帳

(A)單に「手」とのみ記してあるもの（2）

右手於疵、右手灸

(B)指に關するもの（3）

左手大指疵、左手食指疵

(C)臂に關するもの（2）

左手比治折、左手鞆佩疵

(D)掌に關するもの（1？）

右手蘇良灸

(E)手捄とあるもの（5）

右手捄黑子、左手捄黑子

右手捄二灸、左手捄灸

右手捄折（寧樂遺文一九一頁以下）

ところで右の計帳では捄を杯と記してゐるが、一方、次にあげるものでは捄と記してある。

(1′)東大寺奴婢籍帳　寶龜三年

(A)左手於黑子、右手於赤皆（2）

(B)右手食指疵、左手小疵、左手食指疵（三例）

右中指疵、右手食指黑子（二例）（8）

(E)右手捄黑子（五例）、左手捄於黑子、右手捄疵（7）

(F)右手本黑子（同書七七三頁以下）

「杯」はクリノイガでこゝには關係はなく、又他の適當な訓み樣もなく、當時の筆癖から見て、(1)の杯は(1′)の捄と同じと見てよからう。

右の(1)にも「手捄」は多く用ひられてゐるが腕の字は全

く見えない。之に對し、一方「手捄」の字が全く見えないでその代り專ら「腕」の字が同じ位多く見える記錄がある。即ち、

(2)山背國愛宕郡雲下里計帳　神龜三年

(A′)右手於黑子（四例）左手於黑子

手於黑子、右手於炙（7）

(B′)左手指爪辟、右手指黑子、右中指黑子、右食指黑子

（4）

(C′)左臂黑子（二例）（2）

(D′)右掌黑子、左掌黑子（2）

(E′)左腕黑子（三例）、右腕黑子（四例）　右腕疵（8）

右の(1)と(2)とを照らし合はせて見る時、(A)＝(A′)、(B)＝(B′)、(C)＝(C′)、(D)＝(D′)、さうして(E)＝(E′)とが夫と對應してゐる事が分る。(1)の(D)の手蘇良といふのを私は掌の甲の事だと判斷したのであるが、若し手蘇良が掌に關したものでないとすれば、(1)の捄は(2)の腕と掌とを含むものをいふのかも知れない。いづれにしても、(2)には他に比べて最も多く「腕」の表記があるのに「手捄」の字が一つもなく、一方(1)には「手捄」の字が一つもなく、而も他の部分はどちらの記錄にも共に文字が一つもなく、而も他の部分はどちらの記錄にも共に存在するといふ以上、「手捄」と「腕」とは同じものであると見てさしつかへはあるまいと思ふ。

(二)の二

右の結論が正鵠を射てゐるものとすれば、次に「腕」「手捄」をどう訓んだかといふ事である。「手捄」の訓は以上の如くに全く直接には分らないのであるが、「腕」の訓は明白である。

捥　太不佐（新撰字鏡）

腕　タブサ、タヾムキ、ウデ（類聚名義抄）

以二八坂瓊之五百箇御統一纏二其髻鬘及腕（タヾムキ）一……臂著（タシキ）二稜威之高鞆一……（朝日新聞社版增補六國史日本書記神代卷上古訓）

之らによつてタフサと訓まれてゐた事がわかり、又右の神代紀と先の(1)の(E)とから、玉を飾つたり、灸があつたり又折れてゐたりして、而も臂とは違ふのであるから、當然第一關節、手首のあたりを中心として指してゐる事が領會されよう。「手捄」は「腕」と同じであつて、之をタフサと言つたとすれば、タフサは當然、タ（＝手）・フサの事で

あらうから、捴はフサと訓める事となる。

すると、同東大寺奴婢帳の中の下總國司解天平勝寶三年（寧樂遺文七六九頁）に「右手總黑子」とあるのもやはりタフサの事である事が推察される。「總」の字はフサと訓む事は大體言ふ迄もなからうが、猶念の爲にかういふ方面の記錄類でもさう訓んだ證跡があるか調べてみると、天平勝寶二年五月廿七日附の所貫大宅朝臣可是麻呂の東大寺奴婢帳の中に、

奴布佐麻呂　年四　奈爲女子（同書七六二頁）

と記されてゐる同じ人物が、今度は東大寺奴婢籍帳寶龜三年十二月の記錄の中に「以天平勝寶二年大宅朝臣可是麻呂進奴婢例」として、

「死」編首婢　奈爲女

男奴總麻呂　年廿六　左輔車黑子　正奴（同書七八〇頁）

と記されてゐる事からも明らかである。古事記には速總別（ハヤブサワケ）なる人名が出て來るが、御野國加毛郡半布里の太寶二年の戸籍中にも速捴なる人名が見える。

（二）の三

捴の字義については既に先賢の研究に詳しいが、說文に一日捊也とある「捊」の字は新撰字鏡には引也、聚也、取也と記してあり、新撰字鏡中で捴について累也とある「累」の字は同書に綸也といふ義も與へてあり、之はツカサドルといふ義のある字である。說文では「累」は纍が本であるとして、綴得理也と記してゐる。一方、「總」については說文には聚束也、謂聚而縛之也、悤有散意糸以束之とあつて、俗作揔とある。新撰字鏡では「總」は領也、構也、合也、普也、皆也、最也、結也とあり、「揔」にはやはり結、束、合、大凡、皆、最の字が義としてあげてある。右の中、捴、總の字義の共通點の有無を見ると、聚の字が共通に見られ、又ツカサドルはスベツカサドルといふ樣にして總の字にも密接の關係を有して居り、捴の方には手で聚め綴ぢ整理するといふ樣な意味があり、又總には聚め束ねる、聚め合はし結ぶといふ樣な意味があつて甚だ相近い義を有してゐる事が分つて來る。丁度、この兩方の意味に當る國語が正に當時のフサであつたのであらう。和名抄に

總　布散　聚糸成束

とあり、又、フサの用例に

大角豆　佐々介……其一穀含數粒、離々結房、離々布。佐奈流

と記してゐる。又古事記に頂髮といふ字があつて、それについて宣長が

「頂髮中は多藝布佐能那加と訓べし。書紀に此を髮中とあるを然訓み、又景行卷に箭藏ニ頭髻一、崇峻卷に作ニ四天王像一置ニ於頂髮一などあるをも、皆然訓めり。多藝は髮を揚たるを云、布佐は其揚て集めたる髮の繁きを束ねたる處を云。總て物の多きを統集むるを布佐奴と云などと同言なり」（古事記傳三十一）

といつてゐるタギフサのフサモも亦同樣の意で用ひられた語である。タフサも第一關節から先の方に指が離々とあるのを、恰かも第一關節の邊でフサねたと見てつけられた名稱であらう。こゝで先にも述べた如く、萬葉の「〇〇—手折」の用例の中、三例までが採手折であり、他の殘る二例が總、又はフサ手折であつて、それ以外にはないといふ事も考へ合はせられてよい。

以上によつて、採がフサと訓まれるべき事が決定的であると思ふ。從つて、(A)(B)(C)の採手折はいづれも(D)(E)の例と同じくフサタヲリと訓んでよい。

契沖のナがタヲリ、齋藤氏のヒキタヲリ、トリタヲリ、の訓は、同時に又同時代の萬葉以外の記錄に見られる「手採」の讀み方にもすぐそのまゝ參考になるものでなくてはならない事を考へる時、タ(テ)ナガやタヒキ、タトリでは全く意味も不明で當時にさやうな用例のあつたのも全然見かけられない。これから考へてもなほ、フサタヲリの訓は一方にタフサといふ語が存在する以上、より優位を占めるであらう。

(二の(四))

フサタヲリの意義はどうであらうか。

「ふさやかに手折也」（略解）

「ふさは多き事也。今俗ふつさりと言へり」

「フサは澤山の意の副詞」（全註釋）

他の註釋書すべて同樣で、たゞ先の山田博士の說のみが採手折についてであるが、異るだけである。

しかし、フサを採、總の兩方の字の義を含むものと考へる立場に立つ時には、右の澤山、といふ樣な意味は妥當でなく、和名抄の用例から見ても、フサは聚めそろへて束ねるといつた如き意で、フサタヲリは、聚めそろへ束ねる事と手折る事とが同時に行はれてゐる動作とみるべきで一の

熟語と見てよい。むろんフサには副詞的なはたらきがあり、折つて聚め束ねると譯した方がよいかも知れない。さやうなはたらきをする副詞が少からず萬葉には見られる。フサが多いといふ様な意を持つてゐる例は、

名高きかたち人らふさなり（宇津保物語初秋）

天の下の物ふさにあり（蜻蛉日記中ノ中）

……などふさに書きたり（同下ノ下）

などの如くフサニ、フサニアリ、フサナリといふ形で用ひられてゐる。此の意味は、フサの持つもう一つの方の狀態から派生した意義であらう。若し、萬葉の東歌

十四 3484 安左乎良平　遠家爾布須左爾　宇麻受登毛　安須伎西佐米也　伊射西乎騰許爾

の布須左爾がフサニと同じ語で、武田氏の説の如く「フスサは促音に近いものがあるのだらう。澤山に、いつぱいに」といふのであれば、東歌にはさういふ意義で用ひられてゐたかも知れないが、或は又、こゝも先の意義と同じ様に聚メ束ネテといふ様に解してもさうとれない事もない處である。

（一九五二・九・一五）――香川大學講師――

萬葉集講話

八

澤瀉久孝

大寶元年辛丑秋九月太上天皇幸二于紀伊國一時歌

(一)巨勢山のつらつら椿つらつらに見つゝ偲はな巨勢の春野を（卷一、五四）

巨勢山之　列々椿　都良都良爾　見乍思奈　許湍乃春野乎

右一首坂門人足

(二)或本歌川上のつらつら椿つらつらに見れども飽かず巨勢の春野は（同、五六）

河上乃　列々椿　都良都良爾　雖見安可受　巨勢能春

野者

右一首春日藏首老

右の二首はその間に調首淡海の作

朝もよし紀人ともしも眞土山行き來と見らむ紀人ともしも（五五）

の一首を挾んでゐますが、それは(一)と同時の作として並べられてゐるので、(二)の作は(一)の作の類似歌として參考の爲に編纂者があげたもので、その意味ではむしろ(一)と並べあげるべきもので、ここにはこの兩首を並べて私の考を述べてみようと思ひます。

從來の諸注には(一)については相當くはしく述べられてゐますが(二)については云はばつけたりのやうな扱がされてをり、中には解釋を省略したものもあります。それは萬葉集原本蒐集者の態度を尊重するといふ意味では一應尤もな事のやうでありますが、萬葉の作品を明らかにするといふ上から見ると、兩者を同等の位置において、そこから考案をはじめるべきものだと思ひます。先づこの二首はどちらが先に作られたかといふ事から考へます。(一)は作歌の年月が明記されてゐる。この幸の事は續日本紀にも記され、それによると天皇（文武）の行幸となつてをり、太上天皇（持統）と御同列であつたと思はれますが、九月十八日に出發になつてをります。そしてこの歌の詠まれた巨勢の地は次に述べますやうに、藤原の都とはさしての道程ではなく、出發の當日がまた巨勢通過の日であつたと考へられます。ともかく(一)の作は大寶元年九月十八日頃であります。(二)は作の時日が記されてゐないので作者を考へてみますと、續日本紀に大寶元年三月十九日に辨紀といふ僧を還俗せしめて春日倉首老（くらびと）といふ名を賜はつた事が見えてをります。倉首は藏首と同じくかばねの名であります。卽ちこの人はも と僧であつた。その事は本集にも

辨基歌一首

眞土山夕越え行きていほさきの隅田川原にひとりかもねむ（卷三、二九八）

右或云、辨基者春日藏首老之法師名也

とあります。辨基とも辨紀とも書いたと思はれます。この作も紀路の作であり、も一つ紀の川添の背山の作が卷三に見えてをり、(二)の作と共にいづれも同時の作でないかと思はれます。そして作者の名や官位はその作のなされた時の

稱による事が普通であるが、又後の稱による事も多い事、前（講話五、六など）に述べたやうでありますが、後の作に前の呼び名を記すといふ事はあり得ない事は今日の常識から考へても認められます。從つて辨基歌とも書かれてゐる紀路の作は大寶元年三月以前の作と認めてよいと思はれます。即ち(二)の作は(一)より古いといふ事になります。そこで當然(二)の歌から見るべきであり、その場合、(一)の歌はまだ存在してゐないものとして、全然考慮の必要のないものだといふ事を先づはつきり申しておきます。

(二)の歌を解釋するにあたり、はじめにこの作のなされた場所、即ち第五句にある巨勢の地を説明します。巨勢は今奈良縣宇智郡坂合部村古瀬のあたりでありますが、今日の交通機關で申しますと、大阪の天王寺驛から大和を經て和歌山に至る國鐵和歌山線と、近畿日本鐵道の阿倍野橋（右の天王寺と同じところ）から吉野へゆく電車線とが交叉する吉野口驛のあたりといふ事になります。こゝより東南へ今木峠を越えれば吉野へ、西南へ重坂（へさか）峠を越えれば宇智に出て紀路に入ります。畝傍山の西を流れてゐる曾我川の上流の地で、東と西との山が次第に近づいて來てゐるところであります。まづかういふ地形を頭に入れて、さて第一句「川上の」の訓釋にかへりますが、原文「河上乃」とあるのでカハノへと訓む事も出來るし、またカハカミと訓んで河の邊と解する説もあります。「河上」の文字は確かにカハノへとも訓めますが、「河上（カハノへ）」と「河邊（カハノへ）」とは違ひます。第一「邊」の意のへは、「部」、「敝」などの文字を用ゐる所謂甲類の假名で、「上」のへは「倍」「閇」などの乙類の假名で上代假名遣を異にしてをります。

時は今は春になりぬとみ雪ふる遠山邊（トホヤマノへ）に霞たなひく（巻八、一四三九）

山の名と云ひ繼げとかも佐用姫（さよひめ）が許能野麻能閇爾（コノヤマノへニ）領巾（たれ）を振りけむ（巻五、八七二）

霞のたなびくのは山の邊であり、松浦佐用姫が領巾を振つたのは山の上であります。

をみなへし生澤邊之（サキサハノへ）ま葛（くず）原いつかもくりてわが衣（きぬ）に着む（巻七、一三四六）

河千鳥住澤上爾（スムサハノへニ）立つ霧のいちじろけむな相云ひそめてば（巻十一、二六八〇）

まくず原は佐紀澤のほとりにつゞくのであり、霧は川千鳥

のゐる澤の上に立つのであります。だから

河上乃いつ藻の花のいつもいつも來ませわが背子時じけめやも（卷四、四九一）

の「河上乃」をカハノヘノと訓んで川面の意にとるのはよい。藻は水面に浮ぶものでありますから。しかし、かう申したからと云つて「上」といふのが必ずしも物の直上をのみ意味するのでなく、廣く「ほとり」の意にも通用された事は考へられますが、今の場合しひてカハノヘと訓むには當らないと思ひます。またカハカミと訓んで河の邊とする說は

玉島の許能可波加美爾家はあれど君を恥しみあらはさずありき（卷五、八五四）

可波加美能根白高萱あやにあやにさねさねてこそ言に出にしか（卷十四、三四九七）

の二つを例に引くのですが、二つとも河の邊の意に解かねばならぬものではありません。玉島川は神功皇后が魚を釣られたと傳へる石のあるところも川口より一里あまり上流でありますが、川の眺めは更に上流に溯る程よろしく、その上流に少女の家があると考へる事は決して不都合ではありません。まして、

河上に洗ふ若菜の流れ來て妹があたりの瀬にこそよらめ（卷十一、二八三八）

の如きは、申すまでもなく今日我々の使つてゐる川上の意であります。以上の考案によつて今の初句はカハカミノと訓み上流の意にとるべき事が明らかになつたと思ひます。即ち右に述べた曾我川の上流のところであり、吉野口驛のすぐ東にある橋を渡り、川に添うて少し南すると、兩岸の山はいよ〳〵迫つて「川上の」の感はいよ〳〵深くなります。

次に「つらつら椿」の解でありますが、これが問題であります。代匠記に「此ハシケ生ナラヒタル椿ヲ云」とあつて、椿の植ゑ列ねられたをいふと見る說が今日も最も廣く行はれてゐます。しかしこれより先、はやく仙覺抄に「椿ハツル〳〵トシタルモノナレバ」といふ說が見え、由阿の青葉丹花抄にも「ハノ面ツラ〳〵シタルナリ」とあり近くは間宮永好の犬鷄隨筆にも同樣の說が見え、現在もそれによられてゐる學者もあります。又前說を表面に後說をもかけたものと見る折衷說も出てゐます、「松の木の並

みたる見れば」（四三七五）とは集中にもあり、街道筋の松並木は昔も今も變らぬ姿であり、松や杉に並木とつゞく事は極めてふさはしい言葉づかひでありますが、椿の並木といふ事はそれの存在は認める事が出來るとしても、松並木といふ程にその木の性格の表象する言葉にはなりません。それも「並み立てる」といふ風な敍述であればともかくも、「つらつら椿」といふ一つの熟合した名詞になつてゐるといふ事は、「つらつら」といふ言葉と「椿」とが必然的に深い結びつきをしてゐる事を示すもので、その語が端的に椿の特質を表はすものである事を思はせます。さう考へると「並べ列ねて植ゑた椿」といふ風な解釋は適切な解說とは申せないのであります。殊に

あしひきの八峯（やつを）の椿つらに見とも飽かめや植ゑてける君（卷廿、四四八一）

に至つてはいよいよ椿とつらつらとの關係が特殊、密接なものであつて、「椿」といへば「つらつら」といふ言葉が聯想されるやうなものであつたと考へられます。かう考へると右に引用した「椿ハツル〳〵トシタルモノ」といふ事になり、つらつら――つる――つやつや――てらてら――といふ風な類似音が次々に思ひ浮び、椿の葉の光澤說が成立しさうになりませう。しかし「弦（ツル）」を「都良（ツラ）」（三四三七）と云つた例はあつても、光澤のある事をツラツラともツルツルともツヤツヤともテラテラとも云つた例が上代の文獻に見當りません。從つてそれは古語をそのまゝ現代語に引下げて解釋しようとする思ひつきにすぎない事になります。古語はやはり古語に例證を求めて解しなければなりません。

沖邊には小舟都羅（ツラ）々玖（ク）（仁德記）

いさりする　あまをとめらは　小舟乘り　都良（ツラ）々爾（ニ）浮けり（三六二七）

布勢（ふせ）の海に　小舟都良奈木（ツラナメ）（四一八七）

これらの「つら」はいづれも「列」「連」などの文字に相當する意であります。又今の二首の場合も原文「列」の文字が用ゐられてゐます。この事を見合はすと「つら」はやはり「列」「連」の意にとるのが穩かだといふ考に傾きませう。しかし椿の並木が適切でない事は既に述べました。古義に「枝葉の繁み連りたる椿」とあるのはその一難を去らうとして更に一層のナンセンスに墜ちたものと申せませ

う。枝葉の連らない植物はありません。木立でもなく枝葉でもなければ花か實よりない事になります。花と實とは結局同じものの時をへだて姿をかへたにすぎないものでありますが、鑑賞するものとしては、花を措いて實をとらへるとは考へられません。「末べは椿花咲く」（三二二）と歌はれ、「谿べは椿花咲く」（四一七七）と歌はれてゐる。その花であると考へる事が常識でありませう。「葉廣ゆつまり椿　しが花の照りいまし」（仁德記）といひ、「その花の照りいます」（雄略記）ともくりかへされてゐるやうに、目につきやすいその赤い花の、繁つた葉の間に點々と連なつてゐる椿、これこそ最も端的に椿の特質を示すものではないでせうか。海上に點々と浮ぶ小舟をつらつらと云つたと同じく、玉をちりばめたやうに、點々と花をつけた椿を、つらつら椿といふ事は極めてすなほにうなづける言葉であり、椿の特質を最も適切に表現した言葉と云へるのではないでせうか。殊に作者は今現に春光の中に咲き盛つてゐる椿の花を見てゐるのであります。つらつら椿を花と見る事は極めて自然であります。かうして私はつらつら椿を花にうして「つらつら椿」という句が出來てみるとそのツラツラツバといふ音感が何となく葉の光澤をも聯想させるものとなつて、それが一層人々にこの句の愛誦を誘ふ事になつたと考へる事も出來ませうか。椿の文字は萬葉集にはじめて見えてをります。海石榴といふ文字も用ゐられてゐますが、日本書紀にはその海石榴といふ文字だけが見えてゐます。椿の字は漢字にもありますが、これを「つばき」の意に用ゐたのは、春の木の意で日本でこしらへたので漢字とは別の成立であります。「萩」や「偲」（講話三參照）と同様であります。

第三句「つらつらに」はつくづくの意。新撰字鏡には「鵑」に「熟視也豆良豆良彌留」とあります。つくづくと見ても見飽かない、この巨勢の春野は、と倒置句にしてゐるのであります。「見れども飽かず」の句は他に十例ばかりありますが、かうした倒置句はこれ一例であります。一首の意を口譯すると

川上に花の連なつて咲いてゐる椿をつらつら――つくづくと見ても飽かない。巨勢の春の野は

といふ事になりませうか。

春日老は集中に八首の作を殘してをり、最も嚴撰を經たと思はれる卷一に二首、卷三の雜歌中に四首、卷九に二首いづれも家持以前の編輯にかゝるもののみであり、當時歌人として相當に認められてゐた人と思はれます。その人によつてこの「つらつら椿」の作がなされて、それが當時の人に愛誦されてゐた。たまたまその頃紀伊行幸の事があつて、坂門人足もお供をして音に聞いた巨勢野を過ぎた彼は史書に名が見えず、作品も他に見えないところを見ると役人としても歌人としてもあまり高い位置を與へられてゐた人でなかつたやうであるが、春日老の歌を思ひ今現にその野を見て「巨勢山のつらつら椿」と卽興の一首をなした。それが卽ち(一)の作であると私は思ふのであります。しかしこの考へ方は必ずしも私の新見ではありません。山田博士の講義にも『上の「巨勢山」の歌の意の本づく所はこの歌によめる如きものにして、上の歌はこの歌の如きを本としてよめるものなるべし』と述べてあり、土屋文明氏の私注にも「若し春の歌が先に存したものとすれば、人足のは全くのこの場の卽興といふことにならう」とあるが、私は右に述べたやうに、まさしくこれは卽興的なものと考へるのであります。卽ち(一)の作は(二)の作があつたればこそ生れたのであり、(二)の作がなければ(一)の作に無かつたものだと考へるのであります。かう見れば(一)の解釋には何の問題もなく何の滯るところも殘さない事が明らかにならうと思ひます。「つらつら椿」といふ句が愛誦されて一つの成句のやうになつてしまへば、今現に花が咲いてゐなくとも、その語を用ゐるに問題はない。本歌の「巨勢山の(その)つらつら椿」と云つたのであり、下の句も「見れども飽かず巨勢の春野は」をうけて「見つゝ偲はな(その)巨勢の春野を」と云つたと見れば釋然とするのであります。第四句に古來諸說があり、甚しきは誤字說まで出されてゐますが、この歌の成立事情を明らかにさへすれば問題は無くなります。「偲はな」の訓釋については古徑二にくはしく述べておきましたからこゝにはくりかへしませんが、「偲はな」は「偲はむ」卽ち「偲ばう」といふに近いが「む」が推量の助動詞たるに對し「な」はみづから冀ふ意の助詞であり、「偲はむ」よりも希望の意が强く出てゐるのであります。かうして(二)の歌意は

(音に聞いた)巨勢山のつらつら椿をつらつらに眺めなが

ら偲ばうではないか。（見れども飽かずと歌はれてゐる）この巨勢の春野の景色を。

といふ事になりませう。

以上でこの兩首を正しい位置に直した解釋を試み得たのではないかと思ひます。否、集の編纂者も（一）の作を次の作と並べあげはしたが、それだけでは徒に無名作家をして名を擅にせしめる結果となり、解釋にも疑義の生ぜむ事を思つて、その本歌となつた「作家」春日老の作のある事を注意したのであつて、右の如く解する事は、集の編纂者の用意にも答へる所以ではないかと思ふのであります。

（二八、五、二七、稿了）

黄葉片々

袖中抄と類聚古集

吉永登

一

顯昭が袖中抄の述作にあたつて藤原敦隆の類聚古集を見てゐたことは、袖中抄に

あさかすみ鹿火屋がしたに鳴くかはづこゑたにきかば我こひんやは（三八一八）……敦隆の類聚古集には此歌夏の部に入る

（歌學文庫本袖中抄一〇頁、「明かな誤りは正し、送假名は適宜補つた、以下同じ」）

眞鳥すむ卯名手のもりのすかのねをきぬにかきつけてきせんこもがも（一三四四）……但し敦隆が類聚萬葉には鵜歌と眞鳥歌と別に擧之、別鳥と存ずるか（二六頁）

ももつしまあしがらをふねあさきおほしめこそかるらめ心はもへど（三三六七）……敦隆等は部類に葦雁とて此等を雁の部に入れたり（二〇頁）

はねかづらいまするいもはなかりしをいかなるいもぞここだこひたる（九〇六）是は女の花の蘰を敦隆の部類古集に葛の篇に入れたる如何（二六一頁）

などとあることによつて明かである。しかも、これらの引用を通じて、顯昭が同じ類聚古集を、別に類聚萬葉、部類古集などと呼び、さては敦隆の部類とさへ呼んでゐることが知られよう。又、

おもはじといひてしものを翼酢色のうつろひやすきわがこころかな（六五七）……しかれば部類に夏歌にはねずとて一首入る如何（三〇頁）

しかのあまのいそにかりほす名告藻の名は告げてしをなぞ逢ひがたき（三一七七）……但し部類に名乘藻中に此名つけもの歌を入れり（一九七頁）

と、二ケ所に見える「部類」も、共に「敦隆」の語は見當らないが、類聚古集のことであらうと考へられ、これを現存の類聚古集に檢しても矛盾がない。

類聚古集が萬葉集の歌を部類分けしたものである以上、その分類が一つの解釋を示すものであることは言ふまでもなく、從つて萬葉集中の言葉の解釋に關する記事の多い袖中抄が、これを前記のやうに取り上げてゐるのは當然であらう。次に示す例の如きも、たとへ誤つてゐるにしても、決して例外ではないのである。即ち「くしろ」の條には

わぎも子はくしろにあらんひだりての我がおくのてにまきこまし

を（一七六六）……和名（抄）には農耕の具にいれたり萬葉には櫛の歌に入れたり（二一九頁）

とあるのであるが、この顯昭の言ふ「萬葉」は萬葉集そのものでは ない。といふのは、萬葉集ではこの一七六六番の歌は、卷九、相聞の部の最初に

振田向宿禰筑紫の國に退りし時の歌一首

との題詞を伴つて收められて居り、何等櫛とは關係がないからである。恐らく櫛部にこの歌を收めてゐる類聚古集によつたものと考へ

るべきで、或は「類聚古集には櫛の部に……」とあるべきを誤つたものであらう。

二

萬葉集は、本文の外、後世の訓を伴つてゐる。從つて訓のみについて言つても傳本によつて相違することは人も知るところである。その意味では、類聚古集がたとへ別の基準によつて再編成せられてゐるにしても、當然萬葉集の一傳本と考へるべきで、顯昭が袖中抄中でその訓を取り上げてゐることは間違ひではない。例へば

わきもこが夜戸でのすがたみてしより心そらなりつちはふめども(二九五〇)……顯昭云、よとでのすがたとは夜とを出づるがた也、夜戸出をよこでとよみたる類聚古集の本に付いて淸朝臣よこでとよまれき(一九九頁)

とあるごときがそれで、直接ではないが、類聚古集の訓の誤りを指摘してゐる。しかしそれにしても、かうした例が他に見當らないのは思ふに次章で述べるやうに、主として類聚古集を利用して他の萬葉集と一々その訓まで比較することがなかつたためではなからうか。

三

類聚古集は萬葉集中の類歌を早急に引出す便宜のために分類再編成したものであるが、この書を見てゐる顯昭はもとよりその本來の目的に從つて、袖中抄の述作にあたつてこれを利用してゐることは疑ひがない。しかしその引用に當つては、一々斷つてゐないので、果して萬葉集中から直接引用してゐるのか、或いは類聚古集より間接に引用してゐるのかを確かめることは困難であらう。勿論、中には次ぎの諸例のやうに類聚古集によつたと思はれるものもないではない。即ち

をそはやもなをこそまためむかつをのしひのこやてのたひはたかはし(三四九三)不知國(一六六頁)

あさかがたしほひのゆたにおもへらばうけらが花の色にでめやも(三五〇三)不知國(三二頁)

などとある脚註の「不知國」は、直接萬葉集の

以前歌詞未レ得レ勘二知國土山川之名一也と言ふ左注によつて顯昭が要約したと考へるよりは、類聚古集を利用したために、その脚註の「不知國」をそのまま用ゐたものと考へることが、兩者の形式から言つても穩かではあるまいか。又

からすとふおほおそどりのまさでにもきまさぬ君をころくとぞなく(三五二一)

顯昭云、此歌は萬葉集東歌不知國の歌也(一〇〇頁)

とあるのも、現存類聚古集には「不知國」の脚註を脱してゐるが、恐らく同樣に解すべきであらう。或は逆に現存類聚古集を訂正することが出來るやうにも思はれるのであるが今は觸れない。ことの序になほ一例を加へるならば、

萬葉に云ふ

うなばらをやそしまがくりきぬれどもならの都はわすれかねつも(三六一二)

私云、此歌は備後水調郡にて作也(二四五頁)

の如きも、一應萬葉集より直接引用してゐるやうな書き振りではあるが、これも類聚古集によつたものであることは、兩者の左注

備後國水調郡長井浦船泊夜作歌三首（萬葉集）
備後國水調郡作之（類聚古集）

を比較することによつて知られよう。

四

前章で述べたやうに、顯昭が類聚古集本來の目的に從つて、これを利用してゐることは勿論惡いことではない。たとへ一々斷つてゐなくとも、それはあたかも今日佐木信綱博士の分類萬葉集を利用したり、正宗敦夫氏の萬葉集總索引で檢出することがあつても一々斷ることの煩に堪へぬと同樣であらう。しかしもしさうした場合、原本にあたることを怠つたために誤りが生じたとしたならば、問題は自ら別で、利用者は當然その責を負ふべきである。例へば袖中抄に

萬葉九過葦原處女墓時　虫丸集出（「出」活版本に「云」とあるが家本によつて改めた）
いにしへのさゝたおのこのつまとひし菟原おとめの奥城ぞこれ
（一八〇二）……（一七四頁）

とあるが、この歌は萬葉集にあつては

過二葦屋處女墓時一作歌一首并短歌（題詞）右七首田邊福麿之歌集出（左注）

といふ題詞と左注を伴ふ七首中の一首で、諸本異同がなく、當然「田邊福麿集出」とあるべきところであらう。しかるに類聚古集には

過葦屋處女墓時作反歌　虫丸集出
備後國水調郡作之（類聚古集）

とあつて、袖中抄の誤りは全くこれに起因してゐることが知られる。類聚古集の誤りは多分萬葉集においては、一つおいて次ぎに來る歌群（一八〇九―一八一一）が同じく葦屋の菟原處女を悼む歌であり、「右五首高橋連蟲麿之歌集中出」といふ左注を伴つてゐることから生じたものであらう。袖中抄が「葦屋」を「葦原」と誤つてゐるのは、傳寫の誤りであらうか、明かでない。（文部省科學研究費による研究の一部である）

「三袖」存疑

佐竹昭廣

妾が背子は　待てど來まさず　天の原　ふりさけ見れば　ぬばたまの　夜もふけにけり……今更に　君來まさめや　さながづら　後も逢はむと　慰むる　心をもちて　三袖持（そでもち）　床うち拂ひ　現には　君には逢はず　夢にだに　逢ふと見えこそ　天のたり夜を（卷十三、三二八〇）

萬葉集講座第三卷言語研究篇に發表され、後日「敬語法論考」に收められた石坂正藏氏の「萬葉集の尊卑表現の研究」は、上代主として體言に續いた敬稱の接頭語ミが、尊敬の對象（普通、對者もしくは第三者）に對する言語主體の〃たへごころ〃を表はすものであることを明らかにした。

然るに、右の作中の「三袖（ミソデ）」は、作者自身の袖を明指してゐる點、一般の例から逸れた極めて異樣なミとなるのである。尤も作者

自身の事物にミを附けて呼んだと思はれる例は全然ないのではない。

天皇朕が　うづの御手もち（巻六、九七三）
遠き世に　かかりし事を　朕御世に　あらはしてあれば（巻十八、四〇九四）

たしかに右の二例は自らについてミと稱してはゐる。がこの二例は石坂氏も言及されたやうに、何れも天皇みづからの發言の形式をとつて居り、作歌事情も多分に「詔」的であるから、その意味に於いて別箇に取扱はるべきものである。したがつて特殊なこの例を以ては單なるありふれた民謠としか見えない今の歌のミに適用することは到底できない。といつて

ミソデのミは無意義の添辭のみ（新考）

ここでは慣用して自分の袖に言つてゐる。（全註釋）語義を忘れて使用したものであらう。（同上總說）

程度でお茶を濁すのは無責任だし、石坂氏の

或は「妾が背兒」の衣の「ミソデ」かとも思はれるが、もし女自らの「ミソデ」であるとすれば、此の歌の成立過程を考へることによつて、ある解釋に到達し得よう。

からも何ら教へられるところはない。

按ずるに、おそらく「三」は「二」の誤である。もし愚見の如く「三袖」が「二袖」*であつたとすれば、「二手（マデ）」（巻一、七九）（巻三、二三八）（巻十、一九〇七）（巻十一、二八二〇）、「二梶（カヂ）」（巻八、一四五三）（巻十三、三二三二）にならつてマソデと訓み、「左右の兩袖」の義に解し得るやうになる上、傍ら

眞袖持床うち拂ひ君待つと居りし間に月傾きぬ（巻十一、二六六七）

の如き、内容までも酷似した例もあり、甚だ至當であるやうに思ふ。同じくミソデをマソデと關係づけて考へるものには古義、日本古語大辭典などの音韻交替説もあるが、（發生的には或いはさうかもしれないけれども）兩者は既に上代では全く異つた意味用法できへぎれてゐるのであるからこれは考へにくい。即ち、「三袖」は「二袖」*の誤と、敢て誤字説に趨る所以。（一九五三・三・四）

「越野過去」訓義私按

木下正俊

敷妙乃袖易之君玉垂之越野過去亦毛將相八方野爾過奴

これは、朱鳥五年秋九月薨じ給うた河島皇子の妃、泊瀬部皇女に人麻呂が獻じた長歌の反歌である。いま、この第四句「越野過去」の訓義につき、僻見を述べ、大方の御批判を仰ぎたい。

諸本すべて本文に異同無く、訓も金澤本以下舊訓に至るまで皆「コスノヲスギテ」であるが、「テ」を補讀することはこの字面からは無理なやうである。其の後、此の句に

(一)ヲチヌニスギヌ　考、略、攷、古、檜、美夫君志、口譯、豐田氏新釋、講義、土屋氏總釋、新校、私注
(二)ヲチヌヲスギヌ　新考、總索引、代初一
(三)ヲチノヌスギヌ　新校再版本、古典全書本
(四)ヲチヌスギイヌ　木下宰文解

(五)ヲチヌスギヌル　作者類別年代順
(六)ヲチヌスギニシ　童蒙抄
(七)ヲチヌスギユク　新訓、新解、定本、全註釋、古語大辭典、全釋評釋
(八)ヲチヌヲスギユキ　代初二
(九)ヲチヌヲスギユク　代精

（註「野」の訓は便宜上「又」に一定した。）

などの訓が試みられたが、その最も大きな原因は、この歌を除けば「一云」又は「或云」などの所謂注記の、本文と同一なるものが無いなどと説明してゐるが、これらも假説をなす點で、加擔し難いと思はれる。

結句、その何れにも落ちつきかねるものを感じて、寧ろ「越野過（ヲチノニスギ）者（バ）」の誤字と見ようと思ふのである。古本の「者」と「去」とを誤つた例は集中數十箇所に亘つて存し、就中

平山子松末有廉叙波我思妹不相止者（ならやまのこまつがうれのうれむぞはわがもふいもにあはずやみなむ）（卷十一、二四八七）

では、凡ての古寫本が斯の樣に作つてゐるが、「者」を「ナム」と訓むべき理由はない。恐らくは、他の例から推して「去」の誤字であらう。「去」を「ナム」と訓む例としては

物不念道行去毛（ものもはずみちゆきなむも）（卷十三、三三〇五）
物不念路行去裳（ものもはずみちゆきなむも）（卷十三、三三〇九）

の如きがある。これから考へて「者」が「去」となるであらうことも強ちなる誣言ではあるまい。

然し、已に葬り奉つた後に作られた歌に「スギバ」と假定條件として表現することは如何といふ論が或いは出るかも知れないが、事實は必ずしも確定條件としてしか表現すべきではないとは限らず、又敢て(一)を固執する人々は

これは矢張り葬つて了つた後からいつたので「ヲチヌニスギヌ」と訓むが妥當であると思ふ。然らば何故「一云乎知野爾過奴」と註したかといへば、注者は過去をスギユクと訓み過奴とは別訓なりと思つたが故に註したので、同訓ではあるが字が違ふからとの理由で加注したのではないと思はれる（前記横山氏論考）

こはその字面の異なるによりてあげしなるべし（講義）

などと説明してゐるが、これらも假説をなす點で、加擔し難いと思はれる。

結句、その何れにも落ちつきかねるものを感じて、寧ろ「越野過（ヲチノニスギ）者（バ）」の誤字と見ようと思ふのである。古本の「者」と「去」とを誤つた例は集中數十箇所に亘つて存し、就中

平山子松末有廉叙波我思妹不相止者（ならやまのこまつがうれのうれむぞはわがもふいもにあはずやみなむ）（卷十一、二四八七）

では、凡ての古寫本が斯の樣に作つてゐるが、「者」を「ナム」と訓むべき理由はない。恐らくは、他の例から推して「去」の誤字であらう。「去」を「ナム」と訓む例としては

物不念道行去毛（ものもはずみちゆきなむも）（卷十三、三三〇五）
物不念路行去裳（ものもはずみちゆきなむも）（卷十三、三三〇九）

の如きがある。これから考へて「者」が「去」となるであらうことも強ちなる誣言ではあるまい。

然し、已に葬り奉つた後に作られた歌に「スギバ」と假定條件として表現することは如何といふ論が或いは出るかも知れないが、事實は必ずしも確定條件としてしか表現すべきではないとは限らず、

場合によつては
名にし負はばあだにぞあるべきたはれ島浪の濡衣著るといふなり（伊勢六一段）
移し植ゑば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや（古今、卷五二六八）
などの樣に假設前提として表はされることがあることは、木之下正雄氏の「假定條件法について」（國語國文十三卷五號）や、拙稿「條件法における假定確定の呼應の存否とそれに關する萬葉集の訓詁私見」（國語國文二十一卷三號）に於て觸れたことがあり、この場合參照されたい。

このやうに「ヲチノニスギバ」と訓み、「越智野におかくれになつた以上は」と無句絶の歌と解することによつて、「一云」と抵觸することなく無事に理解することができるであらう。但し、かく解することが眞に人麻呂の眞意に觸れたものだと確言する自信はない。たださきにもいふ如く一案として茲に諸賢の御批判を仰ぐのみ。

萬葉關係雜誌論文目錄

文獻解釋の限界性（國語國文八月號）　人麻呂長歌の位置（萬葉第六號）　清水　克彥
—萬葉集の名義をぬぐつて—　小島　憲之　防人等（萬葉第六號）　益田　勝實
出典問題あとさき（國語國文三月號）　小島　憲之　萬葉集に於ける心情表現の特性（萬葉第七號）　北住　敏夫
萬葉集の「和歌」（短歌研究一月號）　石井　庄司　白鳳の宮廷歌人（萬葉第七號）　北山　茂夫
反歌の諸相（文化十七ノ一）　安倍　辰夫
（萬葉の「和歌」の中に文藝としての本質の芽生えが見られるとの論）　中村　茂夫
（反歌は長歌形式の一特色であるが不安定で永續しなかつた）　安倍　俊子
萬葉集の藝術史的位置（萬葉第六號）　久松　潛一　萬葉集の色彩感（文化十七ノ一）
（萬葉的な美意識の一つの現れとしてその色彩感を取上げたもの）　森本　治吉
記紀歌謠と初期萬葉（萬葉第六號）　純粹抒情詩（解釋と鑑賞五月號）
萬葉集の部類（季刊文學研究第十號）　武田　祐吉　人麻呂歌集の音調を諸方面から考察し、七五調の意外に強いことを述べたもの）　瀨古　確
萬葉集における歌格の一考察（不知火第四號）　萬葉集短歌の知的表現について（その二）（不知火第四號）　久保　昭雄
（萬葉人の知覺傾向を時代を追つて考へたもの）
天武天皇をめぐつて（文學三月號）　西郷　信綱
天武天皇御製攷（國文學第九號）　澤瀉　久孝

(3260・25・26・3293の歌をめぐつて民謠—御製—傳誦歌の過程を考へる)　三宅　清
民族文藝學の立場とその限界—犬養孝氏の筑前國志賀白水郎歌論を駁す—(國語と國文學十二月號)　釜田喜三郎
勞働歌としての旋頭歌(白路一月號)　越澤　洋
萬葉集水田耕作歌私抄(明日香路二月號)　犬養　孝
(稻作の面から農村四季の情緒の詠出のあり方を探る)
萬葉集講話六(萬葉第六號)　澤瀉　久孝
萬葉集講話七(萬葉第七號)　澤瀉　久孝
東歌研究のノートから(萬葉第七號)　後藤　興善
萬葉集抄(二十四)(解釋と鑑賞三月號)　久松　潛一
(貧窮問答歌について)
萬葉集抄(二十五)(解釋と鑑賞四月號)　久松　潛一
(「戀男子名古日歌」について)
萬葉集初期作家(三一)(アララギ二月號)　五味　保義
(哀傷つづき150、153、155、159、167～169について)
萬葉集初期作家(三二)(アララギ三月號)　五味　保義
(哀傷つづき156～158、163～166について)
萬葉集初期作家(三三)(アララギ四月號)　五味　保義
(相聞85～88について)
萬葉集初期作家(三四)(アララギ五月號)　五味　保義
回想の歌二三首(萬葉第六號)　神田　秀夫
「玉梓の」小考(西京大學學術報告「人文」第二號)　粂川　定一
(「玉」は美稱、「梓」は梓弓で弓の束の緣で「使」に、射目の緣で「妹」にかかる)
露霜攷(萬葉第七號)　武智　雅一
「ねもころ」考(秋田大學國語國文學紀要創刊號)　佐藤　雄平
(「ねもころ」は「根も凝ろ」で主觀的情意を示す場合に用ゐられる)
「ねもころ考」を讀みて(秋田大學國語國文學紀要創刊號)　北條　忠雄
萬葉集に於ける「ものこほし」と「ものおもふ」(文化十七ノ一)　青木　生子
(黑人の「ものこほし」と家持の「ものおもふ」からの萬葉集の抒情性の解明)
「まをしたまふ」の意義(國語と國文學六月號)　三宅　清
訓詁二題(愛媛國文研究第二號)　武智　雅一
(611「欝悒將有(イフセクアルラム)」・2941「年之經行者(トシノヘヌレバ)」)
柿本朝臣從石見國別妻上來時歌一首私解(愛媛國文研究第二號)(131の長歌の解釋)　森田　虎雄
人麻呂歌集の歌一首(天理大學學報第九輯)
—二三九八の歌について—　大濱嚴比古
萬葉集「草香山歌」攷(東京女子大學論集三ノ3)　藤森　朋夫
(1428の歌を民謠と解する論)
舟公宣奴鳥爾私案(萬葉第六號)　尾山篤二郎
潤和川と潤井川(萬葉第六號)　新村　出
「梅の花咲き散る園」私考(萬葉第七號)　和田　德一
濱木綿の百重なす考(萬葉第七號)　小清水卓二
萬代に過ぎむと思へや(萬葉第七號)　內田　曉郎
大和にしてはわが戀ふる(國語國文十月號)　澤瀉　久孝
鴨君足人香具山の長歌について—傳承歌における對句の轉換—(國語國文十二月號)　吉永　登

いらこ島考（藝林四ノ一）　吉永　登
（23・24の伊良虞島は因幡で地理知識の缺如から伊勢に附會された）
カシハ考（短歌研究三月號）　森本　治吉
萬葉集の山チサについて（白路一月號）松田修
榛の木考第四回（白路二月號）　森本　治吉
（萬葉集のハンの木の歌は全て地名をよみ込んでゐる）
榛の木考第五回――「にほふ」の語義――（附古代人の美感）（白路三月號）　森本　治吉
助動詞「たり」の形式について（萬葉第七號）　春日　和男
入聲音より見た人麻呂の用字法（萬葉第七號）　三吉　陽
借音假名としての唇内入聲音（愛媛國文研究第二號）　三吉　陽
（唇内入聲音は借音假名としては敬遠せられ現れるものは人麻呂關係の例である）
萬葉假名字體（國語研究創刊號）　有坂　秀世
（遺稿）
上代國語の代名詞について（文藝と思想第六號）　笹月　清美
（指示代名詞の諸機能を考察比較し代名詞の品詞としての範圍を考へる）
日本語の動詞の活用形の起源について（國語と國文學六月號）　大野　晋
古代歌謠「かたり歌」私見（福井大學國語國文學創刊號）　青木　紀元
古代文學史における一問題――「たかまのはら」の成立をめぐつて――（國語と國文學一月號）　太田　善麿
日本文學史に於ける古代の概念（解釋と鑑賞五月號）　久松　潛一
日本文學始源（解釋と鑑賞五月號）高崎　正秀
古代前期の文學と環境（解釋と鑑賞五月號）　太田　善麿
神話と傳說（解釋と鑑賞五月號）　中島　悅次
民謠・童謠――記紀の歌を中心として――（解釋と鑑賞第五號）　志田　延義
「矛」の力――天之瓊矛・平國廣矛・柊八尋矛など――（國學院雜誌五十四ノ一）　高崎　正秀
「常世國」雜考（國學院雜誌五十四ノ一）　中島　悅次
口承文藝への案内――民俗文學ということから出發して――（國學院雜誌五十四ノ一）　牧田　茂
天の眞名井（神道史研究創刊號）　武田　祐吉
奈良時代に於けるミカド思想の展開（神道史研究創刊號）　田中　卓
巫女の嘆き（萬葉第六號）　吉永　登
記紀歌謠覺え書――天稚彥神話と歌謠に關する假說――（國語と國文學二月號）　尾崎　知光
伊都加斯賀母登考（季刊文學研究第十號）　山田　純三
古事記の英雄類型とその對象（文學五月號）　德光　久也
古事記の撰錄に於ける「削僞實定」の問題（藝林三ノ六）　梅澤伊勢三
ヤマトタケルの命の物語（藝林三ノ六）　德永　春夫
古事記の純粹漢文的構文の文章について（文學研究第四十四輯）　福田　良輔
淡路島の位置――創世神話における――（國文學第十號）　守屋　俊彥
日本書紀古訓に關する一考察（藝林三ノ六）　上野　務
神功皇后紀の倭女王注記について（史學雜誌六二ノ一）　和田　博德
生活史としての常陸國風土記（季刊文學研究第十號）　鵜殿　正元
筑前國風土記の史料的價値（藝林三ノ六）　深溝　德味
忌部氏の祝詞（神道史研究創刊號）青木　紀元
物語と民俗文藝――日本靈異記論――（國學院雜誌五四ノ一）　佐藤　謙三

日本原始神話についての一考察—大祓詞を中心として—（廣島女子短大研究紀要第三集）　縄田　二郎
奈良朝孝謙天皇時代の詔勅二つ（文化十六ノ六）　曾我部靜雄
*「魏志」倭人傳のよみ方（大谷史學第二號）　三品　彰英
*所謂神代文字の論（藝林四ノ一、二）　山田　孝雄
*平城京に於ける唐制の影響（藝林四ノ一）　大井重二郎
*上代に於ける總領の研究（藝林四ノ二）　家令　俊雄
*古代日本著名人名字（ナアザナ）由緣考（國文學論叢第四輯）　宮島　弘
*律令の婦人財產權（東京女子大論集三ノ二）　川上　多助
*奈良時代における律令官人の給與制度の變遷（ヒストリア第五號）　薗田　香融
*わが國號の史的變遷（駒澤史學第二號）　岩井　大慧
*古代東國雜考（西郊文化第三輯）　林　陸朗
*琉球文學と民俗（國學院雜誌五四ノ一）　宮良　當壯
*古代貴族と神仙思想の關係—文學の問題を中心として—（北陸史學創刊號）　下出　積與
*日本文學の劇的要素（文學四月號）　土居　光知
*平城京に於ける市民の宅地割について（史迹と美術三ノ二）　大井重二郎
資料紹介・眞淵草稿本「竹取翁歌解」（萬葉第六號）　神堀　忍
新刊紹介・高木市之助著「古文藝の論」（國語國文九月號）　小島　憲之
書評・高木市之助著「古文藝の論」（國語と國文學二月號）　大久保　正
書評・金子武雄著「延喜式祝詞講」（國語と國文學二月號）　阪倉　篤義
書評・倉野憲司著「古事記序文註釋」（國語と國文學十二月號）　藤井　信男
書評・倉野憲司著「古典探求」（藝林四ノ一）　田中　卓
萬葉集私注卷十一をよむ（アララギ一月號）
「私注の一面」　小暮　政次
「私注」卷十一をよんで　清水　房雄
民謠理解の立場　安良岡康作
萬葉無名歌の特質　扇畑　忠雄
萬葉集私注卷十二をよむ（アララギ四月號）　橋本　德壽
萬葉集私注卷十二を著者と一しょに讀もう（アララギ四月號）　杉浦　明平

萬葉學會會則

一、本會は萬葉學會と稱する。
一、萬葉研究者、愛好者は誰でも申込によつて會員となることができる。
一、會員の研究發表機關誌として季刊「萬葉」を發行する。
一、本會は隨時、萬葉に關する見學旅行、文獻の展觀、研究發表會、講習會、講演會、圖書の出版、その他を行ふ。
一、會員は年額三百圓の會費を納入する。（誌代を含む）
一、本會の事務は大阪府吹田市千里山關西大學文學部國文學研究室（振替口座大阪二九一四七番）に於いて行ふ。
一、本會の代表者には、澤瀉久孝博士を推す。

投稿規定

一、投稿資格は會員に限る。
一、內容は萬葉に關する各分野の研究論文。
一、分量は四百字詰原稿用紙十五枚以內。
一、投稿原稿は一切返却しない。採否決定は編集部に一任のこと。以上

報告

○第四回講演會

第一日（三月二十八日(土)午後一時・於西日本新聞社講堂）

一、萬葉人の庖厨（くりや）　小島　憲之氏

一、北九州萬葉の特色　福田　良輔氏

一、萬葉に遊ぶ　澤瀉　久孝氏

季節外れの荒天にも拘らず、四百人を越す多數の來會者を得、非常な盛會であつた。

第二日（三月二十九日）

午前中は春日和男氏の引率で、水城都府樓趾・觀世音寺等を見學し、午後一時より太宰府天滿宮において次の講演が行はれた。

一、筑前の守山上憶良　倉野　憲司氏

一、萬葉集と太宰府　澤瀉　久孝氏

昨日に變る春日和で、咲き初めた櫻の下、この日も多數の方々の來會を得た。

第三日（三月三十日）

關西からの來會者を中心に、領巾振山・玉島川等を見學し、大部分はその夜唐泊に一泊して翌朝解散した。この九州講演會においては九州大學・福岡女子大學の方々並びに太宰府天滿宮の西高辻氏にひとかたならぬ御世話になつた。

○第二回研究發表會

五月三十日(土)午前十時より、於東北大學第二教養部第一番教室

一、「わわらば」と「わくらば」　井手　至

一、京極爲兼の歌風　半田　尙子

一、「何せむに」私考　和田　德一

一、ひとつの解讀法　佐竹　昭廣

一、脣內韻尾の省略される場合　木下　正俊

一、「綜麻形乃」　伊丹　末雄

一、京大本詞林采葉抄について　濱口　博章

一、「莫囂圓隣」の訓　菊澤　季生

一、大伴家持の語彙　蜂矢　宣朗

一、萬葉のみちのく歌　扇畑　忠雄

好天に惠まれ盛會、活潑なる質疑應答が行はれ、夕刻より本田會館において懇親會が開かれた。

○第五回講演會

五月三十一日(日)午後一時より、於東北大學第二教養部講堂

一、日に新しい萬葉集　澤瀉　久孝氏

一、生きて來た萬葉集　山田　孝雄氏

引續いて好天に惠まれ、會場は參會者が溢れるばかりであつた。講演會終了後、天然色スライドを使用して、大和及東北地方の萬葉遺跡解説が行はれた。

○見學旅行

六月一日―三日

鹽釜神社、松島瑞巖寺、平泉中尊寺、盛岡艸紫堂等を見學した。

豫告

○第三回研究發表會及第六回講演會

十一月中旬に奈良縣丹波市町天理大學において開催の豫定。なほ研究發表希望の方は要旨（八百字以內）をそへて八月中に關西大學內學會本部宛申込まれたい。詳細は次號に掲載の豫定。

編輯後記

○本誌は今年度も文部省より研究成果刊行費補助金の交附を受ける事になつた。およろこび願ひたい。

○三月二十八日の福岡の講演會は、九州には珍しく雪まじりに雨の零る日であつたが、滿員の盛況であつた。二十九日の太宰府の見學は晴天、梅は既に散つてゐたが、大城の山に殘雪を見、天平二年正月の梅花の宴を思ひ出させた。九州大學、福岡女子大學、西日本新聞社などの諸氏の行屆いた御援助に厚く謝意を表す。特に太宰府天滿宮々司西高辻信貞氏の高配に對して深くお禮を申述べる。

○五月末の仙臺での學會も、北は北海道より南は九州より參加の會員を迎へて、二日とも盛會であつた。特にこの度の學會には、化學、動物、植物、藥學など自然科學方面の諸學者多數の參會を得た事は誠にうれしかつた。引きつゞき有志は鹽竈、松島、平泉方面に遊び、更にその一部は盛岡まで足をのばし、南部紫根染の工場を見學、郊外に自生の紫草を採集した者もあつた。東北大學元教授山田孝雄氏、現教授岡崎義惠氏の直接間接の御後援は申すまでもなく、會場を提供せられた同大學第二教養部當局の好意も忝く、又行先々で御世話をいただいた方々の芳情に對しても衷心よりお禮を申上げる。

（澤瀉久孝）

○二年前の七月、あはたゞしく發足した學會であつたが、毎號早い目に刊行、ここに八號も滯りなくおとどけできることになつた。

○學問に、かたくなな派閥や安易な妥協の許されないことは、いひふるされたことでありながら、いつも新鮮な意味を持つ。本誌も亦、常にかかる立場から論攷を選んで來た。遠く東北から、わざわざ御寄稿下さつた扇畑忠雄氏の論攷に始まる本號も、これに洩れるものでないと思つてゐる。きびしい批判を仰ぎたい。

○思ひ起せば、この二年間、本會も健實な歩みをとげることができた。東西各地での見學旅行、展覽會、講演會及び研究發表會など多彩を極めたが、御芳情厚かつた各種團體諸氏に謝すると共に、困難な印刷事情のもと、本誌のためにそそがれた内外印刷關係者諸氏の御努力に厚く御禮申上げる。

○發足當時と只今とでは、經濟事情も激變し、この度印刷費は再び二割高の騰貴となり、萬やむを得ず、本會會費も値上を乞はざるを得なくなつた。がそれは、誌代は現狀通り三〇〇圓でおさへ、附錄は別個に各氏各界に御利用戴くといふ法をとつた。取敢へず九號の附錄には「萬葉作者系譜」と一部五〇圓の豫心得、只今準備中である。定故、希望者は會費納入の折つけ添へてお送り願ひたい。

○會員相互の交流によつて、本會の充足、ひいては學會への寄與に資したいと、會員名簿を企劃中である。九號には誌末にその一部分を掲載の豫定。ついては、會員諸氏の消息もその後一樣ならずと考へられ、わざわざ御報告願ふのも拘り多いこと、三年度會費納入の折にでも、現住所職業など明記の程、お願ひ申上げる。

○本會顧問齋藤茂吉先生が長逝された。時期遲れの感があるが、ご一生の偉業を讃へ奉りつつ衷心より哀悼の意を表する。

○ぢりぢりと照りつける眞夏の太陽、白雲は悠々と浮いてゐる。かうして本會の三年度が始まる。諸氏の御研鑽を祈りたい。

（伊藤　博）

昭和二十八年七月一日印刷
昭和二十八年七月十五日發行
頒價八〇圓
編輯兼發行者　萬葉學會　振替大阪二九一四七
右代表者　澤瀉久孝
大阪府吹田市千里山關西大學
文學部國語學國文學研究室内
印刷者　内外印刷株式會社　代表　坂本守正

昭和二十八年七月十五日發行

萬葉

頒價八〇圓